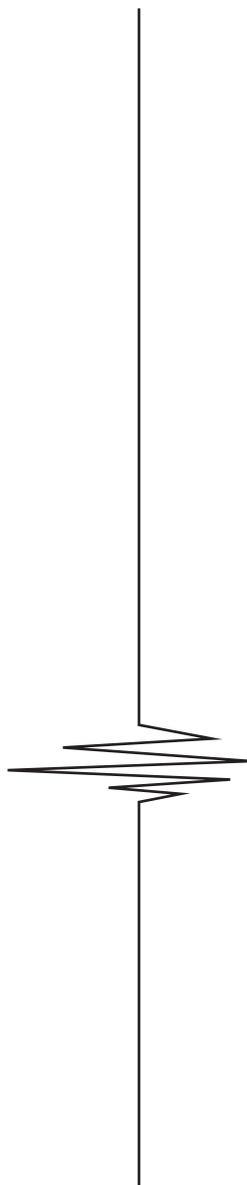
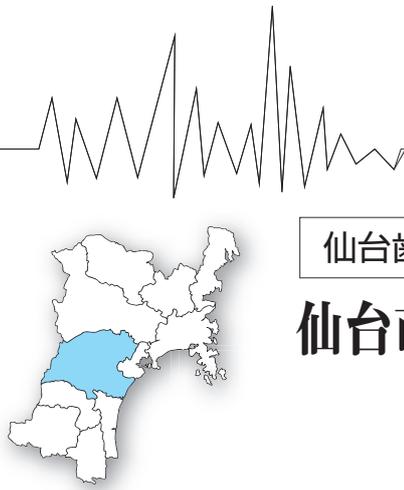


**東日本大震災**

# **宮城県内11支部会の活動**





仙台歯科医師会

# 仙台市における被災者への歯科保健活動について

—平成23年3月11日 東日本大震災—

社団法人仙台歯科医師会 会長 長田 純一

## 1. 地震の概要

- ・発生時刻  
平成23年3月11日（金）14時46分
- ・規模 マグニチュード9.0
- ・市内震度  
震度6強 宮城野区  
震度6弱 青葉区、若林区、泉区  
震度5弱 太白区
- ・津波  
14時49分大津波警報発令  
仙台港 7.2m（推測値）  
（この後も、4/7、4/11、7/10に、M7を超える余震が発生）

## 2. 被害の状況

- ・津波浸水区域 4,540ha（仙台市の約6%）
- ・人的被害 死者704名（10/31現在）  
行方不明者26名  
負傷者 重傷275名（6名）  
軽傷1,994名（65名）  
※（ ）は4/7余震による負傷者
- ・建物被害（10/31時点速報値）  
全壊 26,368棟 大規模半壊20,996棟  
半壊 56,810棟 一部損壊103,230棟
- ・宅地被害に伴う避難勧告 107世帯

## 3. 被害の特徴

- ・東部沿岸地域における津波被害  
宮城野区  
若林区



児童 240 人が屋上で助かった荒浜小学校

- ・丘陵部地域における宅地被害  
青葉区  
太白区  
泉区



地すべりを起こした住宅地

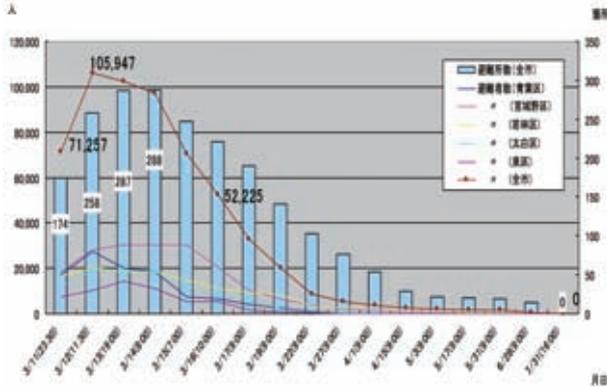
## 4. 避難者の状況

- ・地震発生翌日に、人口の10分の1に当たる約10万6000人が避難所で過された。避難所数は、最大で312カ所設置された。
- ・交通機関やライフラインの復旧と共に、避難者・避難所は徐々に減少し、5月頃より、仮設住宅等へ



の移動も進み、7月31日をもって、全ての避難所が閉鎖した。

避難者・避難所数の推移



全国からの支援により、震災後7日目までに口腔清掃用具を確保し、避難住民への配布と巡回口腔ケア指導を開始した。

- ・大人用歯ブラシ 80,000本
- ・子供用歯ブラシ 8,000本
- ・義歯洗浄剤 1,600箱 他

同時期、避難所での口腔ケアの重要性をプレスリリース (3/18) としてまとめ、ラジオや携帯サイトなどを通じて、情報発信するとともに、住民への個別支援にあたる保健師等専門職に対しても、歯科的需要を把握するための協力を呼びかけた。

## 5. 応急仮設住宅への入居状況

仮設住宅の種類	供給数	入居決定数
プレハブ住宅	1,505	1,471
プレハブ福祉仮設住宅	18	15
公務員住宅等	655	505
借り上げ民間賃貸住宅		8,405

※借り上げ民間賃貸住宅入居者が、仮設住宅入居者全体の80.8%を占める。

## 6. 歯科保健活動

### ○3月11日 (東日本大震災 当日)

電気・水道・ガス等のライフラインが途絶し、情報網や交通網が寸断した。

各区保健福祉センター職員が避難所開設、運営に携わり、要支援者に対する緊急対応等を実施したが、電話・Faxが不通のため、避難所の状況は把握できなかった。

### ○3月12-18日 (大震災翌日～1週間)

避難直後の歯科的ニーズは、口腔清掃や義歯清掃などに集中していた。燃料不足等により物流は停止し、食糧確保も難しい時期であった。特に、避難生活の長期化が予想された沿岸部の避難所では、口腔清掃用具 (歯ブラシ、義歯ブラシ、洗口液) の不足が確認された。

### ○3月15日 (震災後5日目) ～4月15日

仙台歯科医師会より毎日、診療所再開状況の情報提供があり、医療が必要な被災者には稼動している医療機関の情報提供を行うことができた。

ライフラインの普及に伴い、歯科医院は徐々に再開し、3/25 (震災後15日目) は7割、4/11 (震災後1か月) には8割を超えていた。

### ○3月19-31日 (震災後3週間程度)

#### ■避難所における巡回口腔ケア活動の開始

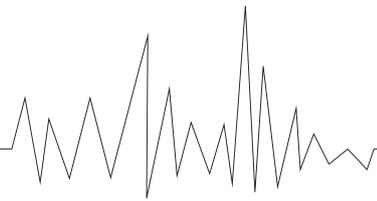
仙台歯科医師会及び宮城県歯科衛生士会の巡回口腔ケアチーム、各区の歯科医師・歯科衛生士のチーム、ボランティア歯科医師等が、各避難所を巡回し、口腔清掃用具の配付とともに、口腔ケア指導を実施した。

#### ―被災者の状況と指導内容―

- ・口内炎や義歯不適合等を訴える方への応急対応と口腔ケア指導
- ・歯科診療所の再開状況の情報提供とともに、医療を必要とする方への受診勧奨

### ○4月1日-5月10日 (震災後2か月頃迄)

津波被害が甚大であった若林区・宮城野区の避難所を中心に口腔内チェック・口腔ケア等の活動を実施した。



### —被災者の状況と指導内容—

- ・水道の使用が可能となった頃から、口腔内は比較的良好である旨の報告が多く挙がる。
- ・食生活を含む環境等の変化から、子どものむし歯や成人の歯周病のリスクが高まり、今後の口腔保健の悪化が懸念されたため、健康教育・健康相談等も継続実施した。

### ○5月11日-7月末頃まで

乳幼児や学童など、避難所に長期滞在するものは少なく、成人は自宅等の片付けに戻ったり、仕事に出掛けるなど、日中の避難所における歯科需要の多くは、高齢者であった。

避難所の巡回口腔ケア活動を継続しながらも幼児健診（4月下旬～5月より再開）を始めとする各種保健事業の場で、子どものむし歯や成人の歯周病予防対策を強化した。

また、地域保健活動として、6月の歯の衛生週間には、保育所や幼稚園を巡回し、健康的な生活習慣を取り戻すことに係る啓発やフッ化物洗口実施への支援等を行った。

巡回口腔ケア指導実績						
	3月	4月	5月	6月	7月	合計
実施避難所数	65	28	8	3	1	105
口腔ケア指導（集団）	12,292	327	200	44	0	12,863
を受けた人（個人）	852	496	66	12	13	1,439

### 【従事者数(延)】

- ・仙台歯科医師会及び宮城県歯科衛生士会：仙歯会103人、宮衛会25人
- ・保健福祉センター：歯科医師14人、歯科衛生士63人
- ・ボランティア歯科医師等：歯科医師21人

（平成23年7月25日現在）

### ○8月1日-9月

#### ■仮設住宅入居者の生活再建に向けた支援

8月上旬、浸水地区から民間賃貸住宅に入居した世帯（約1,800世帯）を対象に、震災復興本部が中心となり調査を実施した。

生活再建情報を届けるとともに、健康状態に不安のある方を対象に健康支援を実施した。今後も約6,400世帯の民間住宅入居者へ郵送による調査の実施をし、健康支援を要する世帯へ各区保健福祉センター等による継続支援を予定している。

#### ■現在の被災者支援

浸水地域を中心とした在宅避難者やプレハブ仮設住居入居者を対象に歯科医師・歯科衛生士・保健師・栄養士が健康相談・健康教育を実施している。また、コミュニティ支援として、民生委員・町内会・地区社会福祉協議会、市民活動団体等による見守り支援、サロン活動、イベント開催など、多彩な支援を行っている。



# (社) 仙台歯科医師会 震災報告書 東日本大震災の記録

(社) 仙台歯科医師会 理事 (広報担当) 古和田一成

## 会員の安否

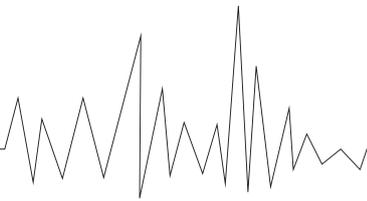
死亡 0名 負傷 1名

## 会員所有の建物の被害 (仙台市発行の罹災証明書があるもののみ)

	全壊		半壊			一部損壊
	全壊	流出	大規模半壊	半壊	水浸・水損	
自宅	8	0	6	58	0	7
診療所	7	1	3	49	1	1

## 震災直後からの仙台歯科医師会本会ならびに歯科福祉プラザの動き (3月分)

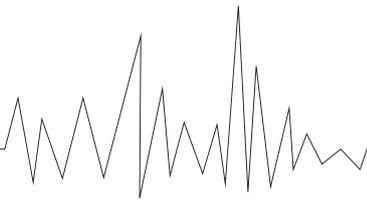
◆歯科福祉プラザの動き (次長の記録より抜粋)			◆本会の動き (事務長の記録より抜粋)	
3月11日(金)	14時46分	地震発生	14時46分	震災発生。
	15時30分	在宅チームAより電話あり、大学協力医を送った後帰還とのこと被災状況を写真及びビデオにて撮影		停電。電話不通・メール不通。職員は肴町公園に避難、衛生士学院の学生避難誘導、当日の会館内の在籍者数と避難人数の一致を確認。
	15時35分	避難勧告発令→全員1階ロビーに一時避難		余震が収まった頃、宮歯職員と協力し、学生を小分けにし、ロッカー室にコートや現金を取りに行かせる。
	15時40分	在宅チームB、八木山より帰還		再度人数を確認し、学生を帰宅させる。本会職員も同様に帰宅させる。
	15時50分	在宅チームB、往診車で障害者患者を旭ヶ丘へ送るため出発		会館に施錠し、自転車にてプラザへ向かう。
	16時40分 16時45分	事務長来所 在宅チームA帰還	16時30分	プラザ到着。 到着時点では、既に患者は帰



	<p>17時00分</p> <p>職員帰宅（第1陣）</p> <p>18時30分</p> <p>在宅チームB帰還※二番丁で渋滞の為進めず戻る。患者は歩いて帰宅</p> <p>18時40分</p> <p>職員帰宅（第2陣）</p>		<p>18時30分</p> <p>在宅スタッフが一部患者を送って戻らず。災害発生時の患者、プラザ全職員の無事を確認。12Fから1Fへ避難。プラザ管理課より、仙歯発電機2台の借用申し出があり、許可。在宅スタッフ戻る。全員帰宅させることにする。プラザ3/12の診療は無理と判断し、患者は全てキャンセル。役員との電話は不通のまま。専務とはメールが繋がり状況を報告し、緊急時の現場の専決権限について許可を得る。23時53分 仙台市医師会より12日（土）11:00～の仙台市災害時医療連絡調整本部会議開催の連絡あり。了承の返事をする。電話会社Aの緊急連絡システムは、先方の初期設定ミスにより、機能せず。携帯電話のバッテリーが全て切れる。</p>
<p>3月12日（土）</p> <p>余震あり</p>	<p>9時30分</p> <p>10時00分</p> <p>10時30分</p> <p>14時00分</p>	<p>障害者歯科協力医来所、午前中いっぱい片付けを手伝ってくれた</p> <p>朝礼（出勤確認）</p> <p>片づけ作業開始</p> <p>アポイント患者への連絡開始</p> <p>協力医への連絡→連絡取れず</p> <p>胸部レントゲン装置転倒</p> <p>3番ユニット床から浮き上がる</p> <p>大型エレベータのみ復旧</p> <p>夜間協力医が来たがすぐ帰った</p>	<p>8時40分</p> <p>通常通り勤務。</p> <p>仙台保険医療課との連絡開始。（会員被災状況・診療所再開情報の共有）</p> <p>災害時連絡調整会議は、専務及びS会員に依頼し、出席してもらった。</p> <p>事務局内・プラザ診療所、医局内の散乱物の片付け。</p>



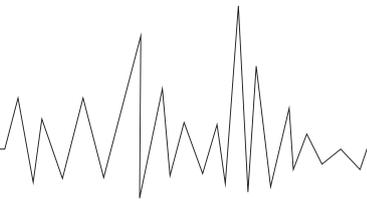
		とのこと(警備より翌日報告あり)		携帯電話のバッテリーをノートパソコンから充電する。 専務来館。 電話会社Bの緊急連絡システムにて役員安否確認開始。
3月13日(日) 余震あり	9時30分 10時00分 10時30分 14時00分	会長より電話あり、県庁に避難中 とのこと 朝礼(出勤確認) 片づけ作業開始 休日夜間救急担当理事来所 アポイント患者への連絡		片付け。 電気復旧。 事務局パソコンがサーバーと繋がらず。 3/16理事会中止決定。 各種会議の中止決定。
3月14日(月) 余震あり	10時00分  10時20分 10時30分  14時00分 15時00分	全員出勤(自転車や徒歩、稼働交通機関乗継ぎで塩釜からも) 朝礼(出勤確認) 職員の住居状況の把握(電気、水、ガス、食糧等) 交通手段・通勤時間の確認(自転車、徒歩など)  食糧:3~4日くらい大丈夫 実家の安否確認が出来ない職員あり 障害者担当理事より電話あり 総務来所 専務より電話あり(自宅電話での連絡可能) かたづけ終了後、職員帰宅させる 一階受付に障害者歯科患者1名来館(明日の予約確認) 次長が対応し状況説明、明日電話もらうことにした		電話復旧。 パソコン復旧。 会長と連絡取れる。 会員安否確認作業開始 (FAX90%、その他電話、メール、郵便など)。
3月15日(火) 余震あり	9時00分	朝礼(出勤確認) 障害者歯科診療の対応を開始 一階ロビーにスタッフを配置し、状況説明の後一緒に12階へ誘導する		



	11時00分	<p>アポイント患者への連絡（電話）</p> <p>医療ガス設備業者に電話→不通</p> <p>バキューム配管破損のため業者に電話→不通</p> <p>一般患者（2名）より電話あり(歯痛及びインレー脱離：会員へ紹介)</p> <p>3/19（土）の夜間協力医へ中止の連絡</p> <p>3/20（日）の休日協力医へ連絡・確認</p> <p>3/21（月）の夜間協力医へ連絡・確認</p> <p>職員の個人的な買い出しも許可したい</p>		
3月16日（水）	<p>9時00分</p> <p>11時30分</p> <p>12時00分</p>	<p>朝礼（出勤確認）</p> <p>職員ミーティング（今後の対応について）</p> <p>食糧等の買い出しチーム編成</p> <p>おにぎりの配給（本会より）</p> <p>副会長より電話（ガソリンがないので来れないとのこと）</p> <p>理事間の連携が充分出来ていない様子</p> <p>医療ガス設備業者に電話</p> <p>避難者より往診依頼あり（避難所：沖野小）</p> <p>本人より直接携帯電話での依頼。電源が切れそうとのことこちらから返事をするのですぐに切った</p> <p>主訴：差し歯が脱離</p> <p>対応：沖野小歯科校医に連絡</p> <p>専務へ避難所への対応を考えなければならない旨を相談</p> <p>プラザへの問い合わせ等への対応について</p> <p>往診車のガソリン不足の問題→</p>		<p>定例理事会中止。</p> <p>避難所巡回 折立中学校</p> <p>※以後、避難所巡回は7/24まで続けられ、若林区の沿岸部保育所への口腔衛生サポート訪問も、6/6～6/8に3回行われた。</p>



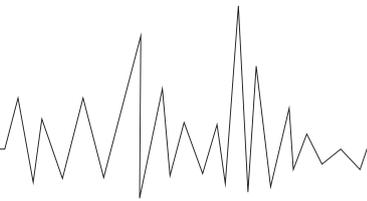
	<p>12時30分</p> <p>14時00分</p> <p>15時00分</p>	<p>緊急車両扱い出来ないか 事務長に、避難所近隣の会員へ仙 歯会として協力依頼文書を出し てもらえないか申し出た</p> <p>医療ガス設備業者来所→点検確 認、使用可能</p> <p>ユニット業者より電話あり（ユニ ット問題ないか）</p> <p>天井からの水漏れあり、ユニット が濡れた旨説明、レントゲン装置 の確認依頼</p> <p>外部協力衛生士Aへ連絡（多賀城 文化センターに避難中とのこと）</p> <p>救急診療の当番は今月いっぱい できない様子</p> <p>日本障害者歯科学会会長より電 話あり</p> <p>障害者歯科関連の診療所の避難 状況を確認中とのこと（今後、学 会として何が出来るか考えたい とのこと）</p> <p>避難所での歯科訪問診療の点数 算定に関する文書を会員へ周知</p> <p>一部職員帰宅</p>		
<p>3月17日（木）</p> <p>雪</p> <p>余震あり</p>	<p>9時00分</p> <p>10時00分</p> <p>11時30分</p>	<p>朝礼（出勤確認）</p> <p>職員買い出しチーム出発</p> <p>職員の生活状況を確認（家族、ラ イフライン等）</p> <p>一般患者（前歯脱離）会員へ紹介</p> <p>一般患者（奥歯ブリッジ脱離）会 員へ紹介</p> <p>日本歯科医師会より電話あり</p> <p>被害状況、稼働状況、新規立ち上 げ事業について問合わせあり</p> <p>東北大障害者歯科治療部より電 話</p> <p>大学からプラザに障害者の患者 を紹介することもあるかもしれ</p>		<p>十二大市歯科医師会より見 舞金送金される。</p> <p>支援物資等も送付される。</p> <p>※この後も多くの団体から 見舞金、支援物資を頂いた。</p>



	11時30分	ないので宜しくとのこと 一般患者（前歯4本脱離）会員へ紹介		
	12時30分	職員買い出しチーム戻る 会員より、自院の診療機器が使えないのでプラザで対応してほしいとのこと →近隣の会員を紹介		
	16時00分	一般患者（歯痛：大白歯）会員へ紹介		
3月18日（金）	8時00分 9時00分	職員A、気仙沼へ救援物資輸送に出発 朝礼（出勤確認） 職員に近隣の避難所へ出向いて自分たちの立場で支援することがないか訪問してみてもどうか提案した		会員診療所の再開、被災状況の確認作業開始。 ※会員の被災状況:死亡0、怪我1。建物の被害は別記のとおりであった。
	9時30分	職員Aより定時連絡あり（松島走行中）		
	9時45分	荒町小学校（避難者60名）巡回 五橋中学校（避難者200名）巡回 ※市の中心部は一時避難者が殆どで、特に困った様子はないとのこと ※避難所内の障害者や老人は少ない様子		
	10時00分	特別養護老人ホームより電話 主訴：義歯の不具合で食事がとれない 対応：後日会員が行ってくれることになった		
	10時40分	会員より電話 往診依頼があったが、ガソリンがないのでプラザで対応してほしい→ 別の会員が行ってくれることになった		
	12時30分	職員Aより定時連絡（気仙沼に入		



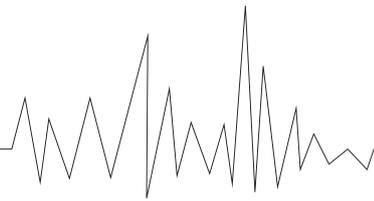
	<p>14時45分</p> <p>15時30分</p> <p>17時30分</p> <p>18時30分</p>	<p>った)</p> <p>一般患者 (クラウン脱離) 会員へ紹介</p> <p>一般患者 (前歯乳歯強打動揺) 会員へ紹介</p> <p>ユニット業者、ユニット等点検のため来所</p> <p>一般 (往診) 患者 (差し歯脱離) 会員が往診に行ってくれることになった</p> <p>職員 A より定時連絡 (米山通過中)</p>		
<p>3月19日 (土)</p>	<p>8時40分</p> <p>9時00分</p> <p>9時00分</p> <p>9時00分</p> <p>10時30分</p> <p>11時00分</p> <p>13時50分</p> <p>15時00分</p>	<p>一般患者 (子供歯痛) 会員へ紹介</p> <p>朝礼 (出勤確認)</p> <p>被災一般患者 (差し歯脱離) 会員へ紹介</p> <p>障害者歯科予約患者来院あり</p> <p>一般患者 (歯痛) 会員へ紹介</p> <p>一般患者 (脱離) 明日の救急診療に来るとのこと</p> <p>一般患者 (歯痛) 会員へ紹介</p> <p>診療機器の故障確認</p> <p>心電計 (3診室、転倒)、光重合器 (技工室、落下)</p> <p>職員 A に月曜日ガソリンを確保するよう指示</p> <p>職員退勤</p>		<p>仙台市健康増進課と避難所市民への口腔ケア等に関して協議。</p> <p>市内避難所を巡回して支援物資 (歯ブラシ等) の配布を開始。</p> <p>避難所巡回 七郷中学校</p>
<p>3月20日 (日)</p> <p>余震あり</p> <p>震度4</p> <p>(13時00分)</p>	<p>16時00分</p>	<p>協力医: 会員、総務</p> <p>DH: 歯科衛生士会から2名</p> <p>午前患者数: 10名</p> <p>午後患者数: 8名 (1名はA病院歯科口腔外科へ紹介)</p> <p>終了</p>		<p>出勤。</p> <p>片付け。</p> <p>会員からの問い合わせ、宮歯との調整。</p>
<p>3月21日 (月)</p>		<p>協力医: 会員、専務</p> <p>DH: 歯科衛生士会から2名</p> <p>午前患者数: 11名</p>		<p>電話会社 B の緊急連絡システムの4月末までの契約延長申請→許可。</p>



	<p>11時00分</p> <p>11時30分</p> <p>15時15分</p> <p>16時00分</p>	<p>■会議（副会長、専務、総務、社 保担当理事） 宮歯会からの依頼について協議 （南三陸町での支援活動に対し て歯科医師10名を仙歯から出し てもらいたい等） （副会長来所） 仙台市内の避難所への対応につ いて ・避難所のリストアップ ・避難所へFAX（高齢者の数、何 が必要か）調査するかどうか 午後患者数：9名 事務長より電話あり、3/25（金）若 林区の避難所3か所巡回について 副会長、総務、社保担当理事が巡 回するとのこと 終了</p>		
<p>3月22日（火） 余震あり 震度4 （18時25分）</p>	<p>9時00分</p> <p>9時30分</p> <p>9時00分</p> <p>12時00分</p>	<p>朝礼（出勤確認） 大学協力医来所（午前のみ） 麻酔科協力医A来所 一般患者（脱離）会員へ紹介 事務長より電話あり 昨日の会議の件、避難所へのFAX アンケートは中止。南三陸派遣も 中止 在宅往診車にガソリンを入れる よう指示あり 在宅チームとミーティング 仙歯会の動き（避難所への対応な ど） プラザキャンセル中の予約患者 の再予約について ガソリン確保問題 一般患者（歯痛）会員へ紹介 事務長より電話あり 25日：若林区の避難所巡回 副会長、総務、プラザ衛生士、</p>		<p>避難所巡回 折立中学校</p>



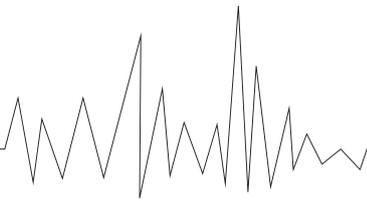
	<p>13時30分</p> <p>14時00分</p> <p>14時20分</p> <p>17時00分</p>	<p>助手</p> <p>26日：若林区の避難所巡回 総務、社保担当理事、プラザ衛生士、助手</p> <p>一般患者（歯痛）会員へ紹介</p> <p>一般患者（脱離痛い）会員へ紹介</p> <p>一般患者（抜歯後の仮封）通院先の会員へ紹介</p> <p>ガソリン12リットル（職員Aが6時間待ちで確保）</p> <p>職員退勤</p>		
3月23日（水）	<p>9時00分</p> <p>11時00分</p> <p>12時20分</p> <p>12時40分</p> <p>13時40分</p> <p>13時45分</p> <p>15時00分</p>	<p>朝礼（出勤確認）</p> <p>麻酔科協力医B来所</p> <p>障害者歯科診療通常通り開始（予約者6名来院）</p> <p>事務長より電話あり、往診車ガソリン補充について</p> <p>避難所巡回（25日、26日、28日、31日）は予定どおり実施する</p> <p>事務長より電話あり</p> <p>会長が今プラザに向かったとのこと</p> <p>会長来所、職員へ慰労・激励の挨拶あり</p> <p>麻酔機器業者来所</p> <p>メーカーに麻酔関連機器の点検を依頼した</p> <p>会長帰る</p> <p>事務長より電話あり、以下について相談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所訪問の件について</li> <li>・これまでの一連の流れの中で感じた問題点について（役員の動きなど）</li> <li>・在宅チームに避難所近隣の歯科医院のリストを作らせ、避難所から往診依頼があった場合には其処に協力をお願いする</li> </ul>		<p>16日開催延期の理事会開催。会員全員の無事を確認し、理事会にて報告。</p>



	17時00分 19時00分	<p>よう指示を出す件について 休日夜間救急歯科診療協力医に 電話連絡・確認 障害者歯科診療協力医へ電話連 絡・確認 プラザの状況と診療の可否につ いて確認連絡説明 テレビ局 A より3/27の救急診療 時間についての問い合わせあり 終礼 職員帰宅 理事会（震災後初めての役員招集）</p>		
3月24日（木）	9時00分  14時00分 14時30分  14時30分 17時00分	<p>朝礼（出勤確認） 障害者歯科協力医来所 事務長より電話あり 25日は在宅のポータブルユニッ トを持っていくとのこと ※先ず何が求められているのか ニーズの把握が重要だと思う 障害者歯科の患者さんがまだあ まり多くないので、協力医には午 前中で帰宅してもらっても構わ ないことを伝えたが14時30分ま で待機してくれた 26日土曜日の協力医へキャンセ ルの連絡 ユニット業者来所（2名） ユニット、レントゲン装置点検 レントゲン自動現像機が回らない 回転ギアが噛みこんでいたため。 →ユニット業者にその場で直し てもらった 協力医帰る 終礼</p>		
3月25日（金） 余震あり	9時00分  13時00分	<p>朝礼（出勤確認） 職員への気配り、配慮も重要だと 感じる 麻酔器業者来所（麻酔器の点検）</p>		<p>仙歯総会開催、定足数に満た ず不成立。  避難所巡回 岡田小学校、高</p>



大粒の雪	15時30分 17時00分 19時00分	問題なしとのこと 避難所巡回から衛生士、助手戻る ※まだ平成22年度決算の見込み が立てられない状況 終礼 定期総会→流会 出席会員3名		砂中学校
3月26日(土)	9時00分 11時40分 12時00分 16時00分	朝礼(出勤確認) 避難所巡回へ衛生士出発(本会から 社保担当理事・障害者担当理事) 衛生士、避難所より戻る 終礼 職員退勤 専務より電話あり 明日の救急診療の準備について 確認		避難所巡回 中野栄小学校
3月27日(日)	10時00分 12時00分 12時30分 13時00分 13時30分 15時30分 16時00分 16時30分	協力医: 会員、休日夜間救急担当 理事 DH: 歯科衛生士会2名 診療開始 患者数は少ない 交通事故で前歯破折との電話あり →A病院歯科口腔外科へ行く ように案内した 被災者(亶理町から避難して来て いる)来院 事務長より電話あり(本会は特に 何もないとのこと) 患者を待たせずに診療継続 庶務担当理事来所 身元確認作業にずっと出っぱなし だったとのこと プラザのことが気になっていた ので来たとのこと 午後の診療開始 午後ここまで患者なし 患者2名来院 終了		出勤。 片付け。 会員からの問い合わせ、宮歯 との調整。



	18時30分	夜間電話が数件鳴った 夜間もやった方が良かったか？		
3月28日(月) 余震あり 震度5弱 (7時45分)	9時00分  12時30分  16時00分	朝礼(出勤確認) 大学から障害者歯科協力医来所 避難所巡回(衛生士、休日夜間救急担当理事、地域保健担当理事) 東北大歯科麻酔科より電話あり 4月からの麻酔協力医について 4月の休日夜間救急診療の協力スタッフの確認 退職する衛生士を送る 挨拶のみとなってしまって申し訳なかった		宮城県歯科医師会館復旧工事開始。 避難所巡回 中山小学校、高砂小学校、高砂市民センター
3月29日(火) 余震あり 震度4	9時00分  10時00分  11時00分  15時00分 16時00分  19時54分 21時00分	朝礼(出勤確認) 大学協力医来所 麻酔科協力医A来所 在宅チームとミーティング 4/1以降はこれまで通りの予約を入れて往診を再開するよう指示した。 避難所への対応は、問い合わせがあった時に随時対応していく。 心電計業者来所(心電計の代替え器との交換) 麻酔器業者来所 全身麻酔の保守契約書について バキューム機器業者来所 麻酔科協力医Aへ挨拶(13年間お手伝いいただいた) 決算見込み書作成 退勤		
3月30日(水)	9時00分	朝礼(出勤確認) 今は職員全員生活は落ち着いてきた様子 家で困っていることはないとのこと		避難所支援対策打ち合わせ会議。  避難所巡回 岡田小学校



	<p>9時15分</p> <p>10時30分</p> <p>11時00分</p> <p>13時00分</p> <p>15時30分</p> <p>16時00分</p> <p>17時00分</p>	<p>麻酔科協力医 B 来所</p> <p>ガソリン確保の件、職員へ指示</p> <p>決算銀行処理</p> <p>麻酔科協力医 B と懇談</p> <p>医療用冷蔵庫修理依頼 (ガラス扉破損)</p> <p>避難所巡回 (岡田小学校 2度目)</p> <p>専務、総務</p> <p>血液分析器業者来所、血液分析器購入の件</p> <p>麻酔科協力医 B へ挨拶 (こちらも13年間お手伝いいただいた)</p> <p>終礼</p>		
<p>3月31日(木)</p> <p>余震あり</p> <p>震度4</p> <p>(16時20分)</p>	<p>9時00分</p> <p>10時40分</p> <p>13時00分</p> <p>13時30分</p> <p>17時00分</p>	<p>朝礼 (出勤確認)</p> <p>常勤歯科医 A、勤務最終日</p> <p>決算関係の処理最終日</p> <p>避難所巡回へ行っている衛生士より電話あり (会長同行)</p> <p>全身疾患のある中学生が歯痛のため、先ず医科に紹介したい</p> <p>対応：次長が仙台医療センターと連絡を取り受け入れを要請、了解してもらう</p> <p>一般患者：歯ぐきが腫れて痛い、精神安定剤服用中</p> <p>幸町近辺で探したい→近隣の会員に相談、紹介した</p> <p>仙台福祉プラザ館長退任の挨拶に来所</p> <p>終礼、退職歯科医 A を送る会 挨拶のみ</p>		<p>仙歯定例発送物送付 (会報はなし)。</p> <p>会員へのお見舞い文書、診療状況報告書提出のお願い文書、保健請求関係の取り扱い周知文書等。</p> <p>避難所巡回 原町小学校、仙台工業高等学校</p>

## 仙台市の避難所における口腔ケア指導等の実施報告（3/11～4/30 中間報告）

主な活動：歯ブラシ、歯磨剤、義歯洗浄剤等の物資の配布  
口腔ケアの啓蒙、歯科相談

実施日	区	避難所名	避難人数	実施状況	
				集団対応	個別対応
3.16	青葉区	折立中学校	195	150	
3.19	若林区	七郷小学校	1000	1000	
3.22	青葉区	折立中学校	20	20	
3.25	宮城野区	岡田小学校	450	450	40
3.25	宮城野区	高砂中学校	200	200	30
3.26	宮城野区	中野栄小学校	100	100	30
3.28	青葉区	中山小学校	18	15	15
3.28	宮城野区	高砂小学校	192	40	40
3.28	宮城野区	高砂市民センター	220	20	20
3.30	宮城野区	岡田小学校	330	330	40
3.31	宮城野区	原町小学校	97	30	30
3.31	宮城野区	仙台工業高等学校	180	50	50
4.2	宮城野区	高砂中学校	60	15	15
4.2	青葉区	折立市民センター	11		2
4.2	若林区	七郷中学校	395	10	
4.3	宮城野区	岡田小学校	335		
4.6	宮城野区	岡田小学校	300		
4.7	宮城野区	高砂市民センター	152		48
4.7	宮城野区	高砂小学校	140		
4.10	宮城野区	田子市民センター	106		
4.12	若林区	若林体育館	320		
4.12	若林区	サンピア仙台	274		
4.13	青葉区	青葉体育館	24	15	
4.16	青葉区	折立市民センター	9		
4.18	宮城野区	高砂市民センター		200	
4.23	若林区	六郷中学校体育館	170		100
		六郷中学校武道館	140		60
4.24	若林区	六郷市民センター	105		60
4.24	若林区	JA六郷	60		10
4.30	宮城野区	福室市民センター	65		35
		計	5668	2645	625



## 塩釜歯科医師会

# 塩釜支部の震災対応及び今後の課題

社団法人塩釜歯科医師会 会長 佐々木元樹

### 始めに（塩釜支部の状況）

塩釜支部内の歯科医院数は74件であるが、11月18日現在において塩釜支部会員の歯科医院または自宅の被災状況は以下のとおりである。（半壊以上）

全壊	3件
大規模半壊	26件
半壊	7件

この中で、現在、塩釜支部を退会し他の地区に移転した会員は2名（岩手へ1名仙台へ1名）、再開を目指して移転先を検討中の会員が1名である。

このような甚大な被害のなかでも、幸いにも塩釜支部内では犠牲になられた先生がひとりも出なかった。

### 活動報告

塩釜支部の活動としては、大きく3つに分けられる。（1）情報の提供と収集（2）避難所訪問による口腔ケア活動（3）検視活動である。

#### （1）情報の提供と収集

##### ①住民への情報提供

ガソリンの不足や、道路状況により通勤不能となった会員が多かったが、自宅と診療所が一緒だった会員を中心に電気、水道などのライフラインが止まる中、震災翌日から救急診療を行った。診療可能な歯科医院の情報を毎日行政側に連絡し、ネットや災害放送などを通じて住民に情報提供を行った。

##### ②避難所の情報の収集

まず、3月20日に被害の大きかった七ヶ浜町の3箇所の避難所を訪問し、何が求められ、歯科医師会として何ができるかを調査した。わかったことは、避難所によって環境格差（衛生面、生活面など）が大きいということであった。食料、飲料水、消毒薬などが不足し洗口場の設置すら困難な避難所があ

る一方で、避難所から塩釜市の病院まで運行バスを出して住民を搬送している避難所もあった。支部会では、各避難所を何回か訪れ、その都度変化する住民の要望を把握するように努め、訪問活動計画を作成した。

#### （2）避難所訪問による口腔ケア活動

活動計画により、最初に行ったことは支援物資の配布と共にパンフレットを配りながら、健康保持のためには口腔ケアが大切であることを説明する啓発活動である。支援物資に関しては、歯ブラシは震災直後から他団体からもある程度提供されていたが、義歯に関するもの、特に、義歯保管ケースや洗浄剤は不足していた。また、感染予防としてマスク、手指消毒剤、うがい薬などの必要性も高かった。

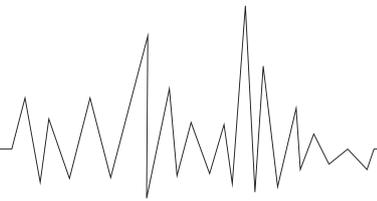
口腔ケア活動の次のステップとして、歯科医師や衛生士による歯ブラシ等を用いて口腔内の清掃及びその指導と、ポータブルユニットや移動診療バスによる応急的な歯科治療を行った。口腔ケアや治療には他県や大学からたくさんの応援を頂いて塩釜市、多賀城市の避難所は浦戸諸島も含め、ほぼ全てを回った。

#### （3）検視活動

今回の震災における検案場所としては、県内で十数か所が設定されたが、支部内では利府のグランデイ21が震災直後からその機能を果たした。

塩釜支部は宮歯からの要請で、まず3月22日から3月31日まで、続いて4月25日から5月14日まで、1日3名体制で午前9時から午後6時までその作業に当たった。また、22日以前から大学関係者から個別に要請を受けて検視活動に参加していた会員もいた。

震災直後にもかかわらず、募集に対して会員が快く応じ、寒さと不慣れな作業の上、遺体に接する心痛、ご遺族のつらさなどをひしひしと感じながらの



活動であった。検視活動にはほぼ全支部会員の協力が得られ、歯科医師会としての社会的責務の一端を果たせたのではないかと考えている。

6月以降に塩釜地区で収容された遺体は、塩釜警察署に収容され、その検視は塩釜支部警察法医歯科協力医が担当した。

## 今後の課題（できたこと、できなかったこと）

今回出たいろいろな問題点を整理し、克服していくことが今後の救急災害対策として必要である。

まず、問題点を支部内で解決すべきものと対宮歯、対行政等、対外的な観点を考慮すべきものに分けて整理してみた。

### （1）支部内課題

①連絡網の整備と安否確認システムの確立 ②会員の救急災害に対する意識の確立

### （2）対外的課題

①宮歯との連携 ②行政との連携 ③他団体との連携

それぞれについて述べていく。

#### ①連絡網の整備と安否確認システムの確立

今回、停電のためパソコンも使えず、また、固定電話、FAXはもちろん携帯電話さえも通じなかった中でも比較的有効に活用できたのが携帯電話でのメール発信であったので、塩釜支部では、現在、携帯メールアドレスでの連絡網の構築に取り組んでいる。当支部では、たまたま震災の1週間前に災害時優先電話を購入しており、震災直後は、この電話で津波被害の大きかった地域の先生に連絡が取れ、安否確認ができたので非常に利用価値が高かった。今後もこの優先電話を有効に活用していく。

#### ②会員の救急災害に対する意識の確立

これまでは災害が起きても自分は大丈夫と考えていたためか、緊急時の連絡情報を提供していただけなかった会員がいた。今回、当然ながらそのような会員の安否確認にかなり手間取った。災害は他人事ではないということが今回の震災で各自認識したと考えている。

今回、塩釜支部会員自身が被災者である中で、検視や避難所訪問による口腔ケア活動など地域被災

者の救済活動、社会的活動への参加を積極的に行なったことは、歯科医師会としての社会的責務をある程度果たしたということで非常に意義があった。自院の復旧にたいへんな時期にもかかわらず協力いただいた会員に感謝する。

### （2）

#### ①宮歯との連携

実際の災害と訓練とは違うことを思い知らされた。安否確認では支部から一方通行で宮歯に報告していたが、支部で連絡のつかなかった会員が直接宮歯に無事であることを連絡していたにもかかわらず、その報告が宮歯から支部に来なかったため支部ではその会員の無事を確認するのに数日を要した。支部と宮歯との双方向の連絡方法が必要である。

### （2）

#### ②行政との連携

避難所で口腔ケアしてほしいとの要請が宮歯や行政側からあったが、避難所訪問に際して最も重要なことはその避難所の情報である。それは人数だけではなく、年齢構成、被災状況、物資の状況等である。これによって配給物資の内容も変わってくるし、ケアだけでなく簡易治療や薬剤の必要性の有無も出てくる。しかも避難所の状況は時間とともに変化する。

今回、問題になったことはこの情報の収集方法である。情報収集に関しては行政に頼ることが多くなる。歯科医師が行く前に行政側の保健婦や衛生士が住民への聞き取りを行い、被災者が求めているものを把握するのがベストであるが、今回のような大惨事では行政側の担当者の疲労や混乱、規模の大きさから情報内容が不確定な面もあるので歯科医師会側が実際に避難所を訪問して情報収集に当たらなければならない場合もある。

塩釜支部では、最初のうちは歯科医師会側の窓口が不確定だったため現場ではかなり混乱したが、窓口を一本化したことにより、宮歯、支部、行政と連携も比較的スムーズになった。的確な情報収集とそれに基づく適切な避難所訪問でなければ我々も被災者側にとっても意味がなくなる。

また、支援物資の提供も被災者のニーズを考える



と、歯ブラシ、義歯ケースなどと品物単位で配るよりも、義歯セット、子供用セットなどのようにセットにして配るほうがいいのではないかと思われる。しかし、物によっては品物単位で配給する必要があるのもやはりその避難所の物資状況の的確な情報収集が必要になる。

さらに、今回の災害で大きな問題になったのがガソリンの不足である。避難所訪問や検視をお願いしてもガソリンがないので行けないといったケースもあった。塩釜支部では2市3町それぞれに災害支援特殊車両としてガソリンの配給をお願いしたが、行政側の対応には温度差があった。これについては宮歯から県を通して各自治体に話を通してもらうなどの処置が必要ではないかと思える。

また、再開した歯科医院の情報は、歯科医師会が行政に随時報告し、行政は文書として役所や避難所に貼り出したり、ネットや災害ラジオ等のメディアを通じて避難所生活者や地域住民に周知した。この情報は、避難所訪問の際にも治療の必要な住民に受診できる歯科医院を紹介する必要があるので会員にも周知しなくてはならない。

### ③他団体との連携

避難所訪問に関しては、特に衛生士会との連携が必要であると思う。今回も衛生士を帯同してきた他県の支援隊は歯科医師と衛生士が業務分担して非常に効率よく口腔ケアをしていた。また、避難所生活が長引くと医師会、薬剤師会との連携も必要になってくる。問題はやはりその窓口をどうするかである。今後の重要な課題と言える。

## まとめ

今回の震災対応を振り返ってみると、大切なことは、いかに被災者の立場で支援できるかということだと思ふ。支援する側としては組織として動く関係上、いろいろな立場の違いや連携のとり方で、行動が遅くなったり、意図したと違ったりすることがあった。しかし、最も大変なのは被災した住民だということをしかり認識して組織、または個人での支援活動をしなくてはならない。

最後に、今回の震災は1000年に一度の大震災と言

われており、確かに平安時代に今回と同じレベルの地震と津波が起きている（貞観地震）。歴史を振り返ると、今後、この地区は当然のこと、東海、東南海地方で大地震が起きる可能性はかなり高い。今回、阪神淡路大震災や新潟県中越地震の経験が活かされたように、今後、大震災が起きた時は、我々が今回の経験を有効に活かして震災対応や支援活動を行わなければならない。そのためには、これまでの対策で不十分だったところは修正し、県レベル、支部レベルでより連携をとりながら災害に対する認識を新たにし、十分な対策を構築すべきである。



岩沼歯科医師会

## 東日本大震災活動報告

岩沼歯科医師会 会長 遠藤 裕三

まず始めにこの度の大震災に際しまして、日歯・宮歯始め全国の歯科医師会並びに関係各位には、多くのご援助とお見舞いそして励ましのお言葉を賜り、誠にありがとうございました。

震災前、当支部は会員数65名59医療機関でありましたが、2名の会員が亡くなり7医療機関が休業・休止状態となりました。その後、2名の入会者があり、2医療機関が民営の仮設ではありますが、再開しましたので、平成23年11月末現在、65名会員55医療機関となりました。当会としましては現在休業中5医療機関に対しましても当該会員の意向を十分に尊重しながら長期にわたり継続してフォローしていく所存であります。

それでは、ここからは震災からこれまでの当会の活動等について報告致します。

### 1) 対策本部の設置

震災前の2月に当会役員改選が行われ、4月1日付けで上原会長から私にバトンタッチになることが決まっていた。しかし、上原会長が診療所、ご自宅共に全壊と言う状況となったため任期前ではあるが私が会長としての職務を行うことを同会長と相談し決めた。まず、対策本部を立ち上げようとしたが、被害が甚大であり身動きが取れない役員も多く

以前に宮歯等に届けた災害対策本部の体制は取れなかった。そこで、名取市は守篤彦専務理事、亘理郡は浅沼慎地域保健医療担当理事、岩沼市と支部全体の統括を私が担当し、各地区各理事等が補佐するという形で進めていくことにした。最初の仕事は会員の安否確認と宮歯への報告であった。電話がほとんど通じない中、自転車や徒歩での作業となったが、比較的早期に確認・報告できたと思う。

### 2) 身元確認作業（検案）

3月12日午前8時岩沼市保健センターに岩沼市三師会の面々が集められた。同市では、予てより仙台空港における旅客機事故を想定し三師会と行政で話し合い、対応法や役割分担等のマニュアルが作成されており、それに従い我々も活動した。ここではその中の身元不明遺体検案状況について述べる。8時半、井口岩沼市長より正式に三師会に対し協力要請がなされたが、電話がマヒ状態であったので、私が近隣の会員宅を訪ね、連絡のついた6名で身元確認作業を開始した。岩沼市の場合、歯科医師が常時3名保健センター内に待機し、必要に応じて隣接する検案場となった市民体育館から、県警の担当者が依頼に来ると言う形で進めた。3月12日午前9時半、当会山田寛先生、福地英夫先生と私の3名で一体目





のご遺体の身元確認作業を行った。これが事実上、岩沼歯科医師会で行った同作業の一番目となった。余談ではあるが、そのご遺体は50歳前後の男性で、私はなぜかいまだに目を閉じるとその方の顔が浮かんでくる。

岩沼市においては、全会員により3月12日から31日までの毎日朝9時から夕方5時まで、4月1日以降は検案場が名取市愛島の警察学校に統合される4月13日まで、お昼休みを利用して確認作業を続けた。

名取市においては、3月12日正午すぎ名取市保健センターの非常勤職員を通じての要請により当初3名の会員により作業が始まった。次第にその数は増え3月16日には、守篤彦専務理事を中心にほぼ全会員が作業に携わるようになったが、名取市の場合それを上回るペースでご遺体が検案場となった旧増田中学校、県立高等看護学校に運ばれてきた。特に、旧増田中学校は、かなり老朽化が進み、小雪がまじる中暖房は無いに等しい状態で、しかも余震が来たら一番に崩壊するような建物であった。さらに、この後上記2検案場と岩沼市の検案場とが県警察学校に統合されたが、そこでは検案場所も待機場所も屋外の校庭にテントを張って設置された。このように同市においては、作業条件がかなり過酷な状況となってしまう、寒さに耐えながら、黙々と作業に専念する先生方の姿には頭が下がる思いであった。同市においては3月12日から4月23日までの長期にわたり連日午前9時から午後5時まで確認作業が行われた。

亘理郡（亘理町・山元町）においては、検案場が郡内の施設ではなく、角田市旧角田女子高となったため情報が伝わらず、初動が遅れてしまい、仙南3支部や宮歯・大学等々の先生方にご迷惑をおかけしてしまった。しかし、浅沼慎理事が中心となり、3月17日から31日まで連日確認作業を行った。この地区でも、運ばれてくるご遺体の数は多かったが、亘理郡では被害が大きかった会員が多かったため、4月からは旧角田女子高は他支部の先生方へお願いし、亘理郡の先生は石巻始め他地区の応援に回るようになった。

以上、当会管内2市2町の身元確認作業の状況であ

るが、病気療養中や体調不良の者を除き、診療所全壊の会員も含めほぼ全会員のべ350人でこの作業を行った。ご遺体数は残念ながら把握していないが、多い日には100体前後のご遺体であったのは確かである。



### 3) 医療救護活動

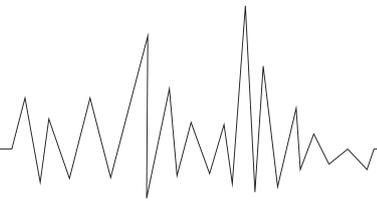
#### 1、救援物資の配給、搬送

岩沼市においては、清水達朗顧問の発案により各会員が自院より救援物資を持ち寄り、3月13日には、同市のこの時点での避難者数約1500人を上回る2000本弱の歯ブラシ等を寄付した。また、名取市・亘理郡でも各会員がそれぞれに保健センターや役所に持ち寄った。後に続々と支援物資が届けられたが、手前みそではあるが震災直後のこの時期の歯ブラシ1本が本当に避難者に喜ばれ、住民や行政からのさらなる信頼を得る結果になったと思う。

とは言え、1人1本の歯ブラシでは、長期的にはどうにもならないので、日歯始め各歯科医師会等から宮歯を経由して3月15日、18日、4月5日と大量に口腔ケア製品を頂き、さらに、直接当会に弘前歯科医師会、中野区歯科医師会、柏歯科医師会からも沢山の支援物資と励ましのお言葉を頂きそれぞれ各自治体に配給した。当会では、これらの物資をただ運ぶだけでなく、後に述べる口腔ケア活動等を通じてその使用法等を説明、実践して住民の皆さんに使用頂いたので各地区とも非常に感謝された。

#### 2、救急歯科医療と口腔ケア

震災直後は、自家発電のある各地区保健センター



等で医科と同じフロアーの一角にポータブルユニットを設置し救急歯科診療の体制をとったが、それほどニ

ーズは無かった。翌週18日になると大部分の所に電気が通じたので、各診療所で簡易水霧装置を使い応急処置を行った。ただ、山元町においては、会員5名中3名が診療所全壊となり、残り2医療機関においても診療再開は当面難しい状況となったため、東北大学の先生や宮歯医療救護班そして各地区有志の方々にご協力を賜り、救急歯科診療や口腔ケア活動にあたって頂いた。また、栃木県歯科医師会の診療バスを提供してもらい、荻原裕志先生が山元町役場駐車場で4月12日から6月30日まで診療を行った。さらに、山元町仮設住宅駐車場に国の第3次補正予算により仮設歯科診療所を同じく荻原先生を管理者として建設中であるが、11月末の現時点では開院日は未定である。

4月に入ると山元町以外の市町の診療所は診療所全壊の会員を除き、ほぼ全医療機関で診療が再開され、歯科医療体制は整備された。そのため、救護活動は避難所や仮設住宅入居者への口腔ケア活動へと移行した。名取市では、会員が各避難所を訪問し、口腔ケアはもちろん相談や治療も行った。他地区でも随時このような活動は行われていたが、どこも組織だった予算を組んでの本格的なものでは無かつ

た。9月に入ると宮城県の方から仮設住宅入居者を対象とした口腔ケア講習会が予算化され、当会管内10か所で12月から来年2月にかけて講習会を開催する予定である。

#### 4) ガソリン問題

上記に述べたいずれの活動もガソリンが無いとどれも滞ってしまう。発災直後は自転車や徒歩が主であったが、長期化するとやはり車が必要となる。そこで当会では名取市を皮切りに、各市町と交渉してガソリンを安定供給してもらえるようにした。これにより、各会員とも各種活動を行うのに交通手段の心配をしないで済むようになった。この事が各活動の成果に大きく寄与したと考えられる。

以上がこれまで、そして今後の当会活動である。今回の教訓として、各種防災対策の他に、日頃から



会員同士や行政、関係団体等と意思の疎通と協調協力関係を築いておく事が、いざと言う時の迅速かつ無駄の無い行動に繋がると思った。さらに当会の課題としては、非常時の通信手段や連絡網の整備、実効ある対策本部の組織化、そして緊急時に会員が集まれる場所、建物の確保が必要と思われる。





柴田郡歯科医師会

## 柴田郡歯科医師会東日本大震災報告

柴田郡歯科医師会 会長 玉野井 修

寄稿に当り、被災されました多くの方々に心よりお見舞いを申し上げます。

当柴田郡歯科医師会では震災直後、遠藤前執行部の元、会員の安否、各町内、全体的な被害状況等の情報収集から始めました。幸い当支部に於きましては内陸のため、停電、断水等はありませんでしたが、被害は沿岸の他支部に比べて軽微でした。(10月時点で自宅半壊3名、自宅・診療所いずれか一部損壊13名)

時間の経過と共に沿岸部の甚大なる被害状況を把握し、直ちに沿岸部に緊急に物資(歯科材料、マスク、グローブ、歯ブラシ等)を届け、旧角田女子高を中心に遺体検視の協力をさせて頂きました。また、柴田郡4町の行政や、救急対応が可能であったみやぎ県南中核病院との連絡を密に取り、各歯科医院の医療提供の現状を伝え、住民への応急的な対応も行いました。各町毎に避難所への物資(マスク、グローブ、歯ブラシ等)を届けました。

4月に入り、玉野井新執行部の元、協議の上、

- 1、柴田郡歯科医師会会員の救済
- 2、近隣支部への救済
- 3、宮歯の他支部への協力及び一般市民への支援

を柱に、人的支援活動と経済的な支援を行う事としました。

支部会員の救済につきましては、震災による収入減の影響が大きいと判断し平成23年度分支部会費、共済費の免除を執行しました。

近隣支部への救済としては、近隣岩沼支部の亘理、山元町の津波被害が甚大との事で、岩沼歯科医師会の遠藤会長に申し入れを行い、当支部副会長で宮歯理事でもある山崎猛男先生を地元のコーディネーターとし、避難所への救援物資の運搬、応急処置、口腔ケアを執行しました。東北大学歯学部(坪

井先生チーム)と他県のボランティアでいらっしゃった先生方と共に手分けをし、地元の先生方へ将来的にバトンタッチできる方向での対応を致しました。

実際に山元町に入った折、マスメディアでは県南沿岸部の被害状況があまり報道されておらず、かなりの被害状況に愕然と致しました。診療可能な歯科医院は宮城病院歯科を含めて3軒程度でしかなく、特に坂元地区は1軒も無く対応が困難な状況でした。それぞれの避難所では着の身着のままですらいた方が多く、最初は応急処置と口腔ケアを実施いたしました。義歯使用者は、また震災で失くさない様にと口腔内に装着したままの方が多く、潰瘍を起こしている方が多い印象を受けました。そのため、義歯洗浄剤、義歯ブラシを積極的に配布し、口腔ケアと共に義歯の洗浄を行いました。

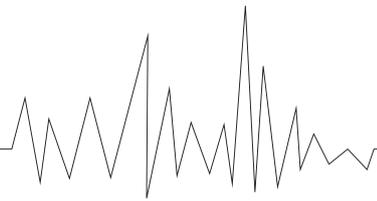
5月に入ると、状況は大分落ち着いて避難所は移動出来ない方のみとなり、人数は減りましたが、かえって口腔ケアの必要な方が増えた様に思われました。また、町内の介護施設が機能していない場所が多くあり、近隣の市町村に応急的に分散し入居され、充足率が150%を越える施設も多く見受けられました。

5月中旬より、各市町村の依頼に対し動くこととなり人的支援活動は一旦終了となりました。

また、他支部や一般住民への経済的支援として津波被害支部5支部へ見舞金、一般へは河北新報社を通じて義援金を拠出させていただきました。

今後の課題としては、

- 1、緊急連絡網の整備
- 2、柴田郡4町の行政との連携の強化
- 3、検視の項目の再確認(義歯のネーミングを含む)



- 4、緊急物資の備蓄
- 5、郡医師会との互助関係の構築
- 6、宮城県歯科医師会や他支部との協力関係の再構築
- 7、緊急時の指揮系統の明確化

等が上げられました。

1の緊急連絡網は今回の震災において、停電に際しメールが非常に役立ち、支部又は宮内でのメーリングリストの構築が必要と思われました。特に、停電によりメディアからの情報が得られず、固定電話も使えない状態で、会員の安否、現在の状況等把握するのが非常に困難でした。その際、携帯電話等のメール等の手段が非常に有効でした。

2は、震災において1番苦慮したのは、ガソリン不足にどう対応するかでした。そのため、支部会員が県北には行きたくとも実際に赴くことが出来ず、県南を主な活動拠点にするしかありませんでした。各町に掛け合い、ガソリン等物資の緊急時の配給、緊急車両の指定など支部内の行政との協定が必要だと思われま

す。3の検視ですが、現場では中々チャートの記入等不慣れで、支部内での講習会等開催し、今後の不慮の事態に備えたいと思っております。また、義歯使用者の御遺体は、義歯がそのまま装着されている場合が多く、義歯のネーミング入れはとても有効と思われました。

4の緊急物資の備蓄は今後起こるべき宮城県沖地震に備え、マスク、グローブ、消毒薬、歯科材料等の郡での備蓄がその後の活動をスムーズに出来る要件の1つと思われま

す。5は地域医療の確保の為、医師会との何らかの協定が必要かと思われま

す。6は、日ごろから親しい近隣支部に緊急時に対応できる関係を再構築する必要があると思われま

す。最後に7は最も肝要と思われま

すが、せっかくボランティアで参加している歯科医師がどこでどうしたらいいのかわからず大変困った事態になった所が多かったようです。今回の震災を期に是非県歯科医師会での指揮系統をよく確認して頂き現場の指揮、コーディネーターになるべく速やかになるよう打ち合わせ、確認が必要と思われま

す。幸い山元町では山崎理事のコーディネーターによりなんとか支援活動ができたので大変感謝しております。今回は如何に情報を手に入れ、素早く行動出来るかということを考える機会になったと思



白石歯科医師会

## 東日本大震災とその対応および今後の課題

白石歯科医師会 会長 小野貴志夫

3.11あの日あの時。

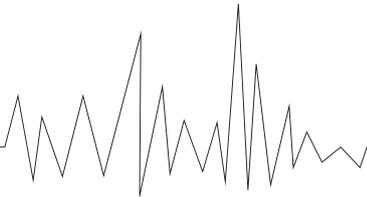
私は、病院が崩れ落ちそうな程の激震と建物の軋む音に慄き、恐怖に竦む患者の手をとり、スタッフと共に道路に逃げ出した。電柱が振り子の如く揺れ、道路のアスファルトに亀裂が走り、マンホールが筍のように道路から突き出してくる。ブロック塀が崩れ落ち、隣家の瓦が落ちて砕け散った。私達は道路にしゃがみ込み、揺れが止まるまでどうすることもできなかった。医院に戻ってみれば、受付のカルテラックは倒れ、カルテが散乱し、その上にレジスター・パソコンが重なり合うように落ちている。診療室のキャビネットはすべて倒れ、材料棚からは、ほとんどのものが床に落ち散乱している。床には落ちた自現機から現像液と定着液が流れだし、混ざり合って異臭を放っている。二階の自宅はほとんどの家財が倒れ、壁に突き刺さっている。食器はすべてが床に落ち、足の踏み場もない。市内は水道・電気・ガスなどのライフラインが断たれ、道路も寸断された。夕刻小雪が舞い散るなか、携帯電話は充電切れで使えず、車に毛布を持ち込み暖を取っていた私は、ナビのTVに次々放映される大津波の被害報告に只々恐れ慄くばかりだった。

白石歯科医師会では、三役と監事が各歯科医院を車で回り、被害状況の把握に努めたが、蔵王町にも会員がいたので、すべての



把握までには、時間を要した。市行政との連携には、千木良副会長が毎日市役所に赴き、日々刻々と変化する震災対応の状況を会員に伝えてくれました。私はガソリン不足のため車での移動が困難になり、自転車で市役所に出向き、情報収集に努めた。臨時の急患対応には、市役所に対応できる歯科医院の掲示をして、住民に知らせ、応急処置に当たった。その後、市との協議の中、歯科医師会の車には「救急医療車」という指定をもらい、優先的にガソリンの供給を受けることができ、歯科医院に対しても必要に応じて灯油の配給をしてもらいました。そのため、私と千木良副会長とで、宮歯へ支援物資を取りに行くことができ、老人施設にも往診できました。さらに依頼のあった旧角田女子高校での身元確認にも協力ができました。ライフラインが回復したのち、白石市には、角田と福島県からの避難民が小学校の体育館やスポーツセンターを仮設避難所として居住することになり、亙理薫専務が支援物資の配給と歯科訪問を行いました。歯科訪問の際には、避難民の要望に応え、歯科相談と口腔ケアそして義歯の修理と調整をしました。

今回の大震災における課題ですが、第1に従来のマニュアルが全く使えなかったこと。これは、震災の規模を宮城沖地震同等程度に想定していたためと思う。県内の広範囲に被害がおよび、宮歯との通信・情報伝達がうまく機能しなかった。回線が切れた電話とFAXとPC、ガソリンのない車、充電切れの携帯電話。さらに白石では、ガソリン不足のためか？自転車の盗難が多発し、私は昼も夜も自転車を家の中に入れた。そのため、他支部を参考に歯科医師会として、緊急電話の設置を検討している。第2に被災者が被災者をフォローするのは難しい。被災した自分の診療所の後片づけで大変な状況なので、その他



の所に応援等に行くことができない。幸いにも、白石では負傷者がいませんでしたが、今後は各会員がそれぞれ非常時に備えておくことが肝要です。最後に市・医師会・歯科医師会・薬剤師会の連携が不十分でした。毎年三師会の会合があり、市の防災マニュアルもあったが、マニュアル自体には具体的な行動を詳細に決めておらず、担当者同士の打合せが必要になり、対応の遅れを増長した。今後より細部に亘るマニュアルが必要です。たとえば、市からの震災対応の情報をコンビニに掲示するとか、被害の程度が少なく急患対応ができる診療可能な医院と歯科医院が、どこにあるかを医師会・歯科医師会が情報を共有して各医院の玄関やコンビニ、公民館等に掲示するようにするとか、黄色の旗を掲げるとかすべきです。また、各自治会の公民館等に非常時の物資や医科歯科の救急物資の保管も検討すべきと考えています。そして市役所に隣接する健康センターには休日歯科診療所があるので、自家発電機の設置を要望していきます。



角田歯科医師会

## 東日本大震災の記録

角田歯科医師会 専務理事 濱上 辰夫

今回の震災について、支部ごとに記録を残しておくとのことなので、私のわかる範囲で記録に残しておきたいと思います。

まず、角田歯科医師会は、宮城県歯科医師会の支部のなかで、一番被害が少なかったことを記録しておきたい。

他支部に比べて本会は、全壊・半壊とも、ゼロで、一部損壊の歯科医院が4件あっただけである。

被害が少なかったとはいえ、6日間停電し、2週間断水した。復旧したと思ったら、4月7日の余震で、また3日程断水しました。

その間、旧角田女子高で、検視が4月末頃まで行われていました。

細谷会長が、17日に旧角田女子高を視察に来られ、角田、丸森の避難所に歯ブラシ等の支援物質を届けられました。

地震当日は、吉田会長が全歯科医院をまわられ、大きな被害がないことを確認されました。電気も電話も止まっており、直接行って連絡をとるしかありませんでした。

2、3日後に、会長、専務が角田の避難所を訪ね、歯科医師会が協力できることはないかと聞きに行きましたが、電話もつながっていない状態なので、要望自体があがってこないとの返答でした。

13日の当番医のところに来院がありましたが、停電のため鎮痛剤のみの処方だったそうです。

旧角田女子高の検視に関しては、24日より柴田、白石支部とともに、角田支部も参加するようになりました。

ご遺体は1000体ぐらい運びこまれたようです。

自衛隊が、本当に頑張っておりました。

警察の方も頑張っており、ご遺体をできるだけきれいにし、持ち物も整理して新しい棺の中に納め

られておりました。

ガソリンも不足しており、ほぼ正常にもどったのは4月になってからでした。

コンビニも一週間以上シャッターが閉まっていました。コンビニが開くようになると、だいぶ安心しました。

街のなかは、古い蔵にはだいぶ被害があったようです。壊されて、平地にされているのを何件も見かけます。ブルーシートもまだ残っております。道路はまだ、かなりでこぼこしております。

阿武隈急行が臨時ダイヤで復旧したのが、5月16日で、通常ダイヤに戻ったのが、12月1日です。

細かい被害はありますけれども、沿岸部を見ると「被害などない。」と、言いたくなる状態です。

今回の震災で、一番感じたのは、水、食料、燃料のありがたさだと思います。

物流が止まるとどうなるか、みんな経験しましたので、心の安心のため、多少物流が止まっても大丈夫な状態にしておきましょう。



## 石巻歯科医師会

# 東日本大震災における石巻歯科医師会の状況

社団法人石巻歯科医師会 副会長 鈴木 徹  
社団法人石巻歯科医師会 広報委員 木村 裕

3月11日の震災では、宮城県は津波による広範囲かつ甚大な被害に見舞われた。石巻歯科医師会の管轄市町村である、石巻市、東松島市、女川町だけでも数千人の死者行方不明者を出し、今回の震災では最も大きな被害を受けた地区となった。石巻歯科医師会では高間木先生が亡くなられたのは残念ではありません。またご家族が犠牲になられた先生もあり、心よりご冥福をお祈り申し上げます。石巻歯科医師会会員の殆どが被害を受けたといっても過言ではなく、石巻歯科医師会の中核である口腔健康センターも大きな被害を受け、機能停止の状態になった。それでも震災直後から古藤野会長、泉谷新会長を中心に石巻歯科医師会執行部が集結し自らも被災したにもかかわらず、会員の安否確認から復興の支援に至るまで、奔走した。

以下に石巻歯科医師会で行った対応について記載する。

- ・会員の安否確認：山本壽一宮歯副会長、鈴木徹副会長
- ・避難所への支援物資の搬送、口腔衛生指導：山本壽一宮歯副会長、鈴木徹副会長

上記いずれも車、ガソリンの手配が困難な中での活動であった。しかも道路事情がひどく、途中で目的地までたどり着けず、戻ってきたりしたこともあり、困難を極めた。最終的に物資搬送には約3か月を要した。

- ・県外、県内の歯科医師会、その他の歯科関連団体による支援のコーディネート：佐藤隆保副会長、鈴木徹副会長
- ・御遺体の身元確認には以下の先生方がその作業にあたった。詳細については後述する三宅先生の記事を読んでいただきたい。

三宅宏之、鈴木裕、古藤野寿広、桑島修悦、佐

藤隆保、齊藤嘉宏、坂井清隆、佐々木一久、今野正道、阿部清一郎、西村秀一、泉谷信博、五十嵐公英

- ・石巻口腔健康センターの復旧の経緯については植木先生の報告の通りであるが、その後8月末までの間、泉谷信博新会長、鈴木徹副会長、両名がセンターに常駐し宮歯、外部団体との対応にあたった。また、センターの復旧に当たっては、古藤野巖前会長が体調不良にもかかわらず、損保会社、建築会社などの対応にあたって頂いた。

石巻地区の歯科医療体制が一体どうなるのか暗澹たる思いが続いたが、8か月経過した今現在、多くの先生方の努力の甲斐があり、すでに診療を再開なさった先生、近く再開予定の先生も多く、復活に向け一丸となって努力している。各市町村の中心部が壊滅的な被害を受けたため、基盤産業の復活、住環境の整備にも長い年月がかかるのは必至で、これからの復興の道のりは厳しいものであるのは間違いない。石巻地区の歯科医療の復興には会員の努力は勿論であるが、各方面の方々とも協力をしてゆかなければならない。

震災から8か月経過した今でもその全貌を把握するのは容易ではなく、会員のほとんど全員が大変な経験をしたわけだが、以下に、口腔健康センターの対応の経緯と会員の経験談のいくつかを記載する。今後この体験談が役立つようなことが2度と起こってほしくはないのは勿論であるが、石巻地区の歯科医師の置かれた立場と活動の状況をご理解していただき、脳裡の片隅に記憶していただければと思う。



## 東日本大震災における石巻口腔健康センターの被害状況

石巻口腔健康センター運営委員会 委員長 植木 裕行

東日本大震災の後、私が初めて石巻口腔健康センター（以後、センターと表します）に行ってみたのは、3月15日の午前でした。私の自宅はセンターと同じ中里地区にあり、冠水状況はだいたい推測はできました。5日目にしてだいぶ水も引き、車道は冠水しているものの傍らの歩道は何とか長靴で歩ける状況となったので、歩いてセンターに行ってみました。

通用口のドアは施錠されており、鍵を回しながら、「施錠してあるという事は、事務の遠藤さんは生きてここから退館したという事だな」と思い安心して入館しました。

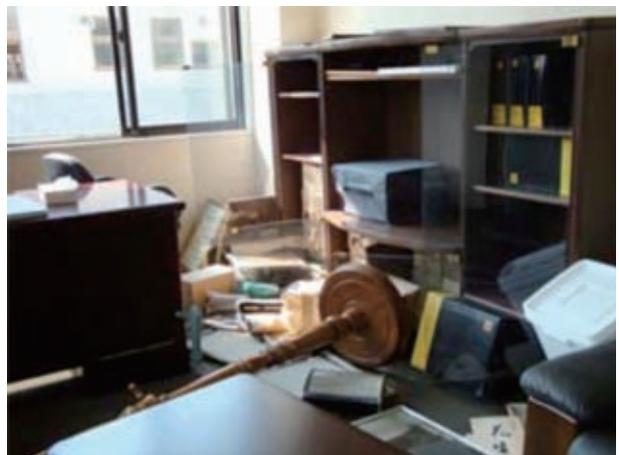
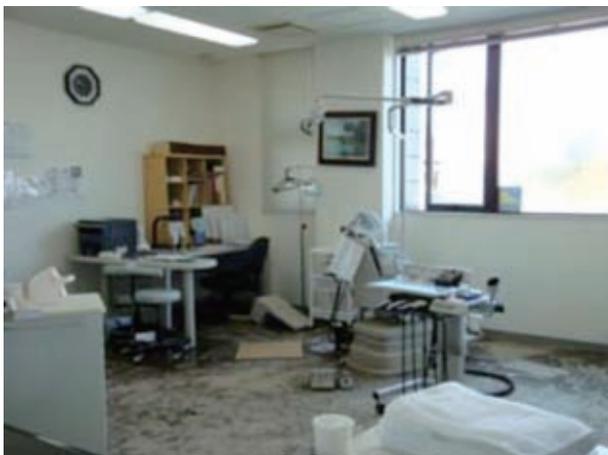
センター内は水は引いていましたが、泥が1～2cm堆積しており、壁の汚れから50cm程度の床上浸水

だったことがわかりました。

センター内はあらゆるものが倒れ散乱していましたが、その後の復旧は当時の会長や専務・副会長らに尽力していただきました。また、実際の作業にあたっては、事務の遠藤さんや津野田さんらにはだいぶ頑張っていただきました。

震災後からセンター休日診療所再開までの経緯を遠藤さんにまとめてもらいましたので、以下に掲げます。

建物の修繕・修理の工事はこれからになりますし、まだまだ完全復旧には時間がかかると思いますが、先生方のご理解とご協力を今まで以上に賜りますようお願い申し上げます。



23.03.11（金）

午後2時46分 地震発生

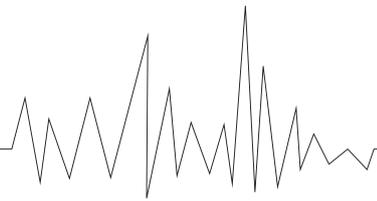
間もなく停電、断水。

あらゆるものが倒れ、散乱し、診療室のユニットも大きく動いた。

地震がおさまったあと、センター内各部屋等の被害状況を確認した。

1階は、各部屋とも落下物や倒れたものが散乱していた。2階は倒れるようなものがないことから、屋外にあるエアコンの室外機が倒れた程度で、さほど被害はないようだった。

その後、できる範囲で片付け作業をしていたが、外でセンター向いの中里小学校に住民が次々と避難して来ているのが見え、その時はじめて大津波警報が発令されていることがわかった。



	<p>余震も続くことから、片付けを中断し午後4時すぎ退館した。 その後、センター内も浸水（床上50cm程度）し、水が引いたのは4日後の3月15日だった。 （休日診療所は3月13日から5月22日まで休止となる。）</p>
03.15（火）	<p>午前、センター運営委員長の植木先生が入館し被害状況を確認。 同日、事務職員も入館し状況確認。</p> <p>その後、古藤野前会長をはじめ役員の先生方や業者等が状況確認に訪れる。</p>
03.24（木）	<p>電気復旧するも1階は冠水により漏電の可能性があるため、蛍光灯のみ通電。他は2階のコンセントから延長コードで対応。</p> <p>植木先生と連絡をとりながら、片付け作業を行なう。</p>
03.25（金）	<p>宮齒より避難所用の救援物資届く。 （山本宮齒副会長、鈴木副会長とで各避難所へ配布）</p>
03.27（日）	<p>臨時理事会開催</p>
03.29（火）	<p>水道復旧</p>
04.02（土）	<p>清掃業者により床の泥掃き、清掃を行なう。</p>
04.07（木）	<p>深夜の地震により再び停電、断水する。</p>
04.09（土）	<p>電話、FAX復旧</p>
04.09（土）	<p>日齒大久保会長、宮齒細谷会長ら被災地訪問でセンターにも訪問。 本会三役で対応。</p>
04.11（月）	<p>水道復旧するも、漏水により応急措置施す。</p>
04.14（木）	<p>臨時理事会開催</p>
05.29（日）	<p>センター休日診療所診療再開</p>



## 「歯科医師として」

石巻市 三宅歯科医院 三宅 宏之

3月11日14時46分、医院には4名の患者さんがいた、足の踏み場もないほど散乱した医院から患者さんを外に避難させる、パーキンソン病で歩行困難な患者さん、腰を抜かして立てない患者さんをスタッフと抱えて階段を下りる、走り周ってタクシーを探し患者さんを乗せてお返した。

近所から来院している老夫婦宅、半身不随の息子と高齢の母親二人暮らしの家を訪ねる、家の中は散乱しているが無事であった、津波警報が出ているので避難するように伝えた。

次にスタッフの安全を考える、地震で落下した隣の瓦でスタッフの車1台が走行不能、1名の自宅は渡波地区にある、医院から見える湊小学校付近はすでに黒い大量の煙が高く登っていた、スタッフ4名と避難所指定の石巻小学校を目指す、道路はすでに渋滞していたので車は置いて歩いて向かう。

津波警報が流れる中、石巻小学校に到着、津波が来るのであればもっと上を目指そうと話し、石巻市立女子高を目指す、市女に到着するが人があふれていて中に入れない、私もスタッフも半そでの白衣で、雪がまっけていて寒いので近くの私の自宅を目指す、自宅から見える南浜町を見て絶句した、その時初めて市女が人であふれている理由を理解した。

門脇小学校に通う長女、次女、日和幼稚園に通う三女、妻の姿が家にはない、門脇小学校に向かうも入れない、途中ずぶ濡れの人と何人もすれ違う、とにかく家で待とう、30分ほどして全員が家に帰ってきた、地震発生後門脇小学校では教員の引率で児童全員は日和山神社に向かった、1年生は学校が終わりすでに帰宅してしまっていた。

家族全員5名、スタッフ4名、スタッフの友人2名、スタッフの兄、私の父と総勢13名で4日間私の自宅で生活した、スタッフを1名づつ家族のもとへ送りとどける、患者さん、スタッフと無事に帰り院長としての責任は果たしたとほっとしたのを覚えて

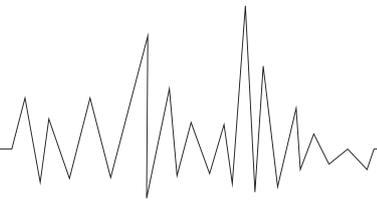
いる。

その後やっと母親、妹家族、弟家族の搜索を始めた、弟の妻、姪二人の安否は判らなかった、鹿妻方面や矢本方面を自転車を探しまわったが会う事ができなかった、鹿妻小学校の先生から津波の後に会ったと聞き、無事を確認した。

次に歯科医師として何をすべきか考えた、市女、石高、石中、門中と避難所を回って代表者に話を聞いたが歯科の需要はなさそうだ、食べる物も毛布もなく歯科どころではない。また市女には須田先生がいらっしゃったので状況を聞いてみたが、入れ歯安定剤が欲しいと言われ、試供品の安定剤とレジンをお届けした、須田先生は避難しているご高齢の方々、けがをした方々にずっと付き添っていたようだ、「朝起きると呼吸をしていない方がいる、また家にいた妻はダメだろう」とお聞きした。須田先生の長男と私は同級生で小さいころ奥さまにはよくお世話になった、奥さまの優しい笑顔を思い出した、奥さまが亡くなり家も無くなったのに献身的にけが人のお世話をする須田先生をみて、私も歯科医師として何かするべきことがあるはずだと思った。

警察歯科医の講習会を2年前に受講していたことを思い出した、身元確認班班長の江澤先生からも、石巻で何かあった時は頼むと言われていた。スタッ





フを全員返した15日夕方に遺体安置所となっていた総合体育館に向かった、すでに鈴木裕先生がいらっしやっ、ずらりとフロア一面に並ぶご遺体とすがりつくご遺族を見てなんとかしなければと思った。警察から「明日はまだ手つかずの牡鹿に行つてほしい、道のりは何時間かかるか分からない」と言われる、鈴木先生に総合体育館をお願いし私が牡鹿へ行くことにした。

16日朝8時、石巻警察所集合、警察車両2台で牡鹿へ向かった、途中の浜の集落が全滅しているのを見て力が抜けた、3時間かかって牡鹿に到着する、ひどい状況である、生存者はいるのか？今日は何体検視しなければいけないのだろうと不安になった、がれきに埋もれた牡鹿体育館の中が遺体安置所になっていた。

身元不明のご遺体が少ない、小さい町なので人相、着衣で殆ど個人を識別できたらしい、雪がしんしんと降り続く中、体育館でひたすら口腔チャートを記入した、体育館のガラスはすべて割れていて風が冷たく手が悴んでチャートがうまく書けなかった、講習会では3人1組で口腔内を見る人、チャートを記入する人、明りを照らす人での実習だったが、ここではすべて一人で行うしかなかった、すでに死後硬直がひどく金属性のヘラを無理やり入れ口をこじ開けた、一人で見てチャートを記入するとなると何度もこじ開けなければならない、検視が終わり石巻警察所に着いたのは20時を過ぎて真っ暗だった、腕が筋肉痛になっていた。

17日に総合体育館のご遺体は300体を超えてフロアが一杯になり、18日から旧青果市場が遺体安置所になった。

17日から24日まで毎日、旧青果市場に通った、総合体育館から考えると10日間毎日である、このころ津波に流された方が楽だったかもしれないと考えていた、うつ状態だったと思う、25日に休みをもらって26日から28日まで、4月は古藤野寿広先生、佐々木一久先生、西村秀一先生、阿部清一郎先生、齋藤嘉弘先生、桑島修悦先生、泉谷信博先生が来てくれて交代制になったので3日、6日、7日、8日、9日、13日、16日、17日、18日と検視に出た。

3月17日に検視に来て頂いた大崎支部の川村洋先生から古川は被害が少ないので、石巻支部の為になんでもするとの申し出があったので避難所を見てほしいとお願いした、20日に川村洋先生と大崎支部副会長の戸田慎治先生（現会長）が避難所の現状を見たいと連絡があったので、検視の合間に市女、石高、石中、門中と市役所を回った、市役所の健康管理課で対応してくれた課長から「兵庫県などから数名の歯科医がきているが、どこに行っていたかいいのかわからない、歯科医師会と連絡が取れなくて困っている、避難所や市民から問い合わせがあると診療してそうな医院を紹介しているが治療していただいているのかわからない」との話だった、避難所に仮設診療所を設置するとお話し了解を得た。

その後何度か市役所からボランティアの歯科医師がきているがどこに行っていたかいいかと連絡があり、石中、門中に行っていた。

21日に門中4階に仮設診療所を作った、私は2度目の牡鹿での検視だったので古藤野寿広先生に仮設診療所設置をお願いした、機材や薬などは大崎支部の先生が自分の診療室から持ってきていた、初日だけで患者は20名をこえ対応に困っているようだった、その後東北大からの応援もあり避難所での応急処置は機能しているようだった。

また航空自衛隊松島基地の歯科医官からも連絡をいただいた、避難所での歯科治療ができる体制があるとの話だったので、状況をお伝えした。

3月中は身元不明のご遺体のみチャートをとった、3月20日89体、21日72体、22日142体、23日158体、24日99体、25日65体、と朝8時に石巻警察署に集合し、2階の刑事1課でお茶を出されミーティングに参加し警察車両に乗せてもらい旧青果市場に向かう、鑑識4名と私で乗車し今日も頑張ろうと明るい曲をかけモチベーションを上げる、到着後ひたすらチャートをとる、帰りは20時をすぎている、帰りの車の中は、朝とは違って変ってみな無言である、警察署で下され自宅まで自転車で帰るがふらふらだった。身元不明のご遺体だけでこの数であるが、身元判明のご遺体も合わせると、ピーク時は1日に300体くらいは搬送されていた、陸上自衛隊の大きなトラック

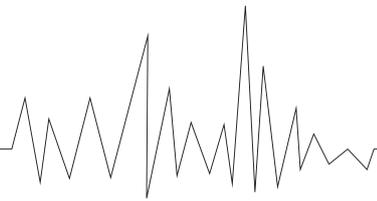


に何体も積まれ、ご遺体を下す入口では順番待ちのトラックがいた、自衛隊の隊員が、ご遺体を重ねて運んで来てもいいだろうか？と聞くので、それは亡くなった方に失礼なのでやめて下さいと話した。

ご遺体の顔写真が旧青果市場前のテントに貼りだされ、ご遺族を見て似てると思うご遺体があれば、警察官と一緒に入って来て確認する、外では安置所に早く入れろとご遺族と警察官で小競り合いが始まっていた、しかし警察官と一緒にいざ入って来て、これはと思うご遺体を何体か確認するが、途中で皆やめてしまう、大きな旧青果市場のフロア一面に並べられた1000体を超す遺体に顔色が変わる、身元不明のご遺体は遺体袋のチャックを開けて顔を出しておくことになっていたが、がれきでつぶされたご遺体や焼死体も多い、家族を探したいと思う気持ちもあるが、この現状を見て耐えられないのであろう。

がれきで頭部がつぶされたご遺体は何体もあり検視は大変だった、喉まで手を入れ脱落した歯牙をさがし、上顎骨、下顎骨の骨折を整復し顔を整えて歯槽渦に歯牙を戻してチャートをとった。また焼死体で自衛隊が車の中の灰を集めてビニール袋に入れて何体か持ってきた、法医の先生と灰の中から歯牙と骨を一生懸命さがした、法医の先生も私も真っ黒になりながら探し、チャートを作った。今思うと自分でもよくできたなと思うが、その時は毎日、身内を発見し大声で泣きじゃくるご遺族、放心状態で立てなくなるご遺族をたくさん見てすべてのご遺体を家族に帰すというモチベーションが強かった。

遺体袋から小さな女の子を取り出し、半日ずっと抱きしめていた母親がいた、案内した警察官もそばに半日ずっと立っていた、その傍らでチャートをひたすらとる、その場から逃げだしたい気持ちで一杯だった。小さい男の子のご遺体に泣きながらすがりつく小学生くらいの女の子がいた、弟だったのだろうか、母親が一生懸命なぐさめる。高齢のご遺体の周りに10人位のご遺族が泣きくずれる、皆に愛されたやさしいお祖父さんだったのだろう。服を着せてもいいかと聞かれたこともあった。家が流しご遺体を持ち帰れないと言い一生懸命、遺体袋の下に布団をひいていたお婆さんもいた。発見場所が同じ3体のご遺体があった、母親と小学生くらいの子供二人である、父親は無事なのか？この状況から立ち直れるのか？そんな事を考えながらチャートをとった、2、3日後、父親と思われる長身の体格の良い男性が警察と確認しにきた、ご遺体の顔を見たとき大きな叫び声をあげ泣き出した、場内で作業していた、警察官、自衛隊、歯科医すべての手が止まった、近くでチャートを取りながら私も泣けてきた。チャートを記入していると後ろから「ママだけ生き残ってごめんね」とささやく声が聞こえてきた、小さなご遺体に話しかけている女性がいる、胸を締め付けられる思いで耐えられない、検視作業よりもご遺族の悲しみに触れることの方が辛い。ある焼死体で法医の先生からDNAが採取できないので、抜歯して欲しいかと頼まれた、大白歯の歯髄からDNAを採取したいらしい、身元不明のご遺体は、法医がDNA照合のため心臓からの採血と鑑識が足の親指の爪を採取していた、しかし抜歯はいくら身元判別のためとはいえ遺体損壊になる、すぐに江澤先生に電話した、できないだろうが調べてみると言われ折り返し電話がきた、法医学会、県警本部で調べたがやはりだめである、後に江澤先生からその時の電話で私が何度も「本当に抜歯をしなくていいんですか？なにでも残しませんよ」と食い下がって怖かったと言われた、江澤先生も苦渋の決断だったらしい、もちろん私の為を思っただけの判断でもあったのだが、身元不明のご遺体を家族に帰すために私がいるのに何もできない悔しさがあった、次の日の朝、自医院に寄り



エレベーターと抜歯鉗子をポケットに入れて石巻警察署にむかった、隙を見て抜歯するつもりだったが直前になってやめた、日本歯科医師会の応援で遠くは沖縄県から自医院を休みにして検視に来てくれている先生方や江澤先生に迷惑がかかってしまうと思った、現在カルテやDNAによる照合がすすめられているが、焼死体は前歯部が炭化して無くなっているうえ口を開くと崩れてしまうため臼歯も見えない、DNAも無く身元不明のままである。

子供の検視はつらかった、死後硬直で開かない小さな口にスパチュラをねじ込み無理やり開ける、家に帰してあげるからお願いだから開けてくれ、心の中でお願いする、乳歯列でカリエスのないご遺体を何体か見た、母親が食生活に気を配り、仕上げ磨きもきちんとしていたのだろう、どれだけかわいがっていたか想像できる、私はチャートを取りながら早く家に帰れるように顔に付いた泥や鼻血のあとをきれいにし、泥だらけの前髪を上げきれいな顔を出してあげる事しかできなかった。

5月に入り遺体の搬入は落ちついてきた、宮城県の検案所は気仙沼、南三陸、石巻の3か所になった、5、6月は日本歯科医師会の応援にまかせ、週に1度行く程度になったが7月で日本歯科医師会の応援が終わり現在石巻は、鈴木裕先生、阿部清一郎先生、佐々木一久先生、五十嵐公英先生と私で昼休みと、私が休診日の木曜日と日曜日に行くようにしている、宮城県歯科医師会の応援もありその他の曜日は古川の先生や仙台の先生が来てくれている、遺体の損傷がひどく口腔内からスプーンでうじをかき出しながらチャートをとっている。7月から検案所は旧青果市場から釜のふれあい広場に移動した。真夏にテントの中での検視はつらい、オベ着の下のTシャツの汗がしぼれる、また暑さが遺体の損傷を加速する、オベ用の帽子、オベ着、ビニール製のエプロンをして髪や衣服に付いた臭いは取れない、マスクの鼻のところにはハッカ油を染み込ませている。損傷がひどいご遺体にうちの主人だといってすがりつく女性がいた、一緒にきた親族は損傷がひどいご遺体に近づけない、ご遺体から引き離し歯科のカルテを持ってくるように勧めた、この一件以来ご遺体

の損傷、臭いは、我慢できるようになった、あたりまえだが、私が検視しているご遺体は皆、だれかの夫、妻、父親、母親、息子、娘なのである。

大規模震災や事故の場合、救急治療などで医師の活躍は脚光をあび、広く認識されているが歯科は話題にもならない、歯科治療はあくまでQOLの向上、より良い生活、より良い人生を送るための手助けをする仕事であり震災や災害などの緊急処置を必要とする場面では活躍の場が無いと思っていた、しかしこのような広範囲に及ぶ開放型の大規模災害では硬組織と金属で多様化している治療痕が個人の特定に役立っている、むしろもう歯科の治療痕でしか個人の特定はできないのではないだろうか、日々の診療で美味しく食べれるように、きれいな笑顔で笑えるように治療してきたが、今回の検視で個人の特定をすることも、亡くなった方、ご遺族にとってのQOLだと思う。

残暑が厳しい今もご遺体の搬入は続いている、台風などで海底が荒れると、海底のがれきや、ヘドロのなかのご遺体が浮上してくるようだ、石巻市だけでまだ1000名近い行方不明者がいる、長い仕事になりそうである。



## 私の前に道はある—— 3.11東日本大震災を乗り越えて

東松島市鳴瀬歯科診療所 五十嵐公英

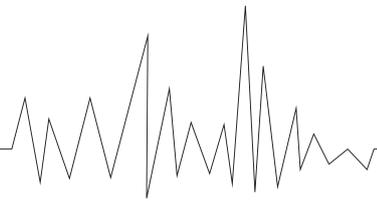
序章：3月11日午後2時46分、宮城県牡鹿半島沖を震源とするM9の、観測史上最大といわれる巨大地震が発生し、高さ20m超の巨大津波が東北地方の太平洋沿岸部の市町村に襲いかかりました。地上のあらゆるものが破壊され、町は廢墟と化し、奪われた生命は1万5千人を超え、行方不明者は今なお4千人余といわれています。東松島市は、鳴瀬町と矢本町が6年前の平成の大合併で誕生したばかりですが、隣接する石巻市の3千名に次ぐ1千名を超える死者を出すほどに大きな被害をうけました。中でも旧鳴瀬町地区では4軒の医院・歯科医院・診療所の全てが被災ただけでなく、野蒜地区の藤野先生と佐幸先生そして高間木先生が犠牲になりました。更に、宮戸、野蒜小学校の学校保健委員会で一緒だった薬剤師の織谷先生も帰らぬ人となってしまいました。長く地域医療や学校保健に貢献されていた先生方だけに悲しくもあり、非常に残念でなりません。地域医療の充実した、鳴瀬町地区の一日も早い復興を切望してやみません。

3月：あの時、3回連続して大きな揺れを体感しました。瞬時に停電。診療中だった30代のお母さんが子供を保育所に迎えにいくと飛び出していき、2名の高齢者は同じ町内ということで相乗りで帰宅。もう一人のおばあさんは嫁が迎えに来るのでそれまで待機。その間、大きかったね、家の中ゴチャゴチャしてるだろうねなどと雑談。3時20分ごろ迎えが到着し、帰宅。大きな地震だったが診療所の建物被害は確認できない。しかし、診療室の中は停電、断水、通信不通、そのうえカルテやレントゲンは散乱。後片付けは明日にしよう、たぶん患者さんも来ないだろうからと臨時休診に。スタッフが帰ったのは3時半頃。私も、これだけの地震だと仙台のほうの後片付けが大変だろうと、戸締りを確認して仙台に向かいました。防災無線も何も聞こえず、静かなものでした。鳴瀬川にかかる橋は壊れてなかったの

で安心。ただ、三陸道が通行止めになったもので45号線上りが大渋滞。これじゃとUターンして野蒜から大塚を経由して松島に向かいました。地震の速報を聴こうとTBCに切り替えたのですが「ツー」でした。NHKは津波警報を出していたと思いますが、詳細はなし。松島までの海岸線は快適で、たった1台私の前を枯葉マークを付けた軽トラックが走っているだけという閑散とした状態でした。高城川にも潮位の変化はなく松島は空っぽ。なんで地震の後片付けをしないんだろう、みんなどこへ？なんて。松島から利府街道に抜ける途中の町営無料駐車場に来たら大勢の人が。避難？津波なんて来るわけじゃないかなんて思いながら利府街道へ抜けたのですが、仙台が近づくにつれ渋滞はひどく、結局着いたのは7時頃でした。それでも、まだ、鳴瀬が大変なことになっているという認識はありませんでした。

翌日、診療所がどうなったものやら気になり、診療所を見に出てきました。45号線を北上して吉田川、鳴瀬川、堤防の壊れた様子はありません。でも鳴瀬大橋を渡り、水に浸かる小野の町並み見てこれは尋常ではないと初めて気付きました。何で、どこから浸水した？そして、どんよりとした小雪舞う寒空の下でみた診療所、海岸から2km程も離れているのに、建物は15cm程の海水に取り囲まれていました。愕然としました。建物の外観はとどめているものの、玄関ドアは破れ、壁には褐色の数本の線が津波の痕跡を生々しく刻んでいました。壁の線、地面から約150cm程でした。前日まで開いてあった鉄製の門の片方は閉まり、二人でも持ち運び出来ないほどに石油の残っていたタンクが駐車場の真ん中に流されて。訳が分からず、何も考えることもできず、ただ写真だけを撮ってその場を後にしました。

震災後のガソリン不足と食糧危機で診療所にはなかなか近づけず、スタッフの安否が気がかりだったが通信事情の悪化で連絡がとれず、状況が改善す



るまでは「動かざること山の如し」を決め込みました。結局、全員と再会できたのは3月31日でした。地震の後のスタッフ達もかなり大変な生活を余儀なくされた様子で、当時のことを語ってくれました。渡波から通勤している彼女は誰もが心配していましたが、何と、真直ぐ帰宅せず、あっちこちに寄り道をし、津波との遭遇は近くのコンビニだったと。店長の計らいで他のお客さん達と一緒に屋上に避難したというのには驚かされました。たまたま駐車した場所が良かったみたいで、車もタイヤが濡れただけで済んだとも。他方、石巻から通勤している彼女の場合は、家に着いたら津波に襲われ、すぐさま家の2階に駆け上り難は避けられたものの、流されてゆくマイカーを勿体なく見送りしながら、水没したマイホームの二階で一夜を明かしたとか。大変だったねーとしか言葉をかけられませんでした。

診療室の中、床上浸水痕跡は窓枠を超え、約90cm位までのようでした。パノラレントゲンはコントローラーユニットを含めて浸水、4台の診療台はターンテーブルの上までヘドロが残り、高周波治療器を含む治療器具、オートクレーブ、自現機、レセコン、口腔内撮影用カメラ、そして愛用していた位相差顕微鏡もヘドロまみれの使用不能の状態でした。カルテやレントゲン写真類も惨憺たる有様でした。唯一生き残ったのが二つ、レセコンのデータUSBとレジスター。データはその後大活躍をし、レジスターは停電のため開けることのできなかった事が幸し、若干の窓口収入を回収できましたが、実に天の恵みで助かりました。

先代の中里先生が10年という歳月をかけ、無歯科

医地区だった鳴瀬町に築き上げた歯科医療の灯を消してしまうようなことは、先生に申し訳なくとも出来そうにありませんでした。同時に、歯科診療所の再開を一日千秋の思いで待ち望む住民の期待も大きいことが分かり、診療所を復活させようとスタッフ達と誓い合いました。不安になったのがスタッフの雇用。長くて半年、どうする？2か月遅れで振り込まれる診療報酬があるから、取敢えず雇用は継続し、その後は成り行きに任せるか、夏季手当もその時の状況を見て判断すればいいだろうと、基本給を支給し続けることに決めました。半年は持ちこたえられるだろうが、そう長くは続けられない。そのためにも復旧を急がないといけない。実に、患者さんたちと思いが一致していました。

4月：駐車場の桜の木が色づき始めたころ、いよいよ復興に向けての始動です。築30数年経つ、木造モルタル造りの時代遅れの診療所ですが地震にも津波にも負けなかった。壊してしまうには忍びなく、改修して復活させようと決めました。まずはトイレと駐車場の確保。ウォッシュレット機能はいかれてましたが、水洗機能は健在で、これで断水さえなければ安心という状態でした。もう一つの駐車場の確保、そのためには3~5cmの厚さに堆積した粘土状のヘドロを除去しなければなりません。アスファルト舗装ではない300坪の敷地を人力ではままたならず、隣組の櫻井建設の社長さんに頼み、1週間程かけてブルで一気に片付けてもらいました。建物近くは人の手で、それこそ丁寧にやっていただきました。駐車場の確保ができた次はいよいよ診療所の中の大掃除。汚れてしまった器材の撤去はヨシダ歯科機器メーカーにお願いし、窓から屋外にポンポン。たった1日で片付け終了し、いよいよ診療所の改修作業が始まりました。一日も早い再興のために自分たちが手伝えることはないかと聞いたら、せいぜい床下のヘドロ除去と。ホームセンターで購入した道具とビニール袋を片手に、床下のヘドロ除去に挑戦。来る日も来る日も、連日の慣れない作業の為筋肉痛を訴えながらのきつい仕事でした。春休みだからとスタッフの子ども達も応援してくれました。技工士さん達も馳せ参じてくれました。東北大学の



先生達にも援軍に来ていただきました。その甲斐もあって作業は捗り、この調子だったら6月には再建できるかな、なんて楽観視していたら、中旬から改修工事がストップし、一向に進まなくなってしまいました。菅総理の言う、お盆前までに全員仮設住宅へ入居させますということで、仮設の建設最優先になっていたのです。GWを前に急に見通しが暗くなり、先の見えない不透明な状態となってしまいました。

一方、診療所の隣の私が普段寝泊まりしている院長宅も水没し、診療所と同じ状態になっていました。診療器材の撤去のために来ていたヨシダ歯科機器メーカーの皆さんに手伝っていただき、ヘドロまみれになった数少ない家財道具、畳を一気に撤去していただき、空っぽの状態に。寝泊まりできる場所を確保しようと、3部屋あるうちの台所に近い東側の床板を掃除し、その上に新聞紙、段ボールを敷き、さらにその上をブルーシートで被い院長室の仮住まいとすることにしました。でも寝具類はどうしても汚れてしまいます。そこで、たまたま購入してあった一人用のドームテントを部屋の中に設営し、その中にそれらを入れ、そこで寝泊まりするようになったのですが、これが実に私にはぴったしの環境で、毎日の疲れが嘘のようにとれて回復していききました。東洋経済新聞社の記者がこれをネット配信したため、一気に広まってしまい、今も片付けないでそのままにしています。西側の部屋は、診療所から運び出し、水洗・乾燥させ整理したカルテ、レントゲン写真や材料品などの倉庫代わりとなりました。

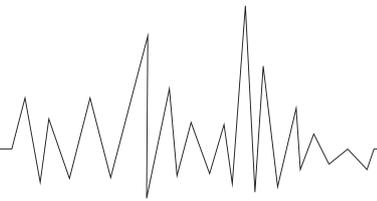
4月のこの時のもう一つ忘れられない出来事、それは口腔内所見の照会でした。遺族の方が身元の確認のために歯型が欲しいと来院されました。幸いカルテは流されずに保存はできたもののバラバラ。6500枚近い中から求めのカルテを探し出すのは一苦労でした。レセコンから出てくるのは最近の治療内容で口腔所見は出て来ません。何とかして欲しいという遺族の方達の熱意に打たれ、汚れた全カルテ・パノラマレントゲンの水洗・乾燥・整理をし、即座に求めに応じられるようにスタッフ達が奮闘。その甲斐があり、余りこれといった特徴のない

若い子の歯牙所見の記録と一致して身元確認されましたと遺族の親に何度も感謝されました。生きて再会できれば最高の喜びでしょうが、そうはならなかったとしても家族のもとに帰してあげたい、そんな遺族の心情が胸の奥深くに刻み込まれました。7月、警察歯科医会の登録をし「検死」に加わるきっかけになりました。

無歯科医療地域と化してしまった鳴瀬地区に歯科医療の手を施すにはどうすればいい？そんなことを考えて思いついたのが診療車の依頼でした。全国に10台余りあるという歯科診療車の派遣を依頼しようと会長に電話し、さらに副会長にも。宮歯の役員の方にも要請しました。東松島市の歯科医療機関の7割が回復しているといってもそれは旧矢本地区での話で、旧鳴瀬地区は全滅です。早急に診療車をお願いできないか。電気も水道も復旧しているし、治安もいいところだから、と。

5月：満開の桜の散り始めたGW最中の5月1日、東京保険医協会のメンバーが鳴瀬地区の医療支援に来るということで現地案内を頼まれました。宮戸島の大浜は廃墟、室浜は壊滅状態でした。これから瓦礫の撤去だという小学校の体育館に避難している顔見知りにあい、宮戸島では津波による死者は出なかったと誇らしげに語ってくれたのが印象的でした。5月5日、兵庫保険医協会が、東松島地区に医療支援にくるといので又々案内を頼まれて、避難所に。その時です、宮歯の大内先生から携帯が入り、診療車を運んでいく、何処で待ち合わせをすれば？一瞬何のことかと。ロックタウンの駐車場で待ち合わせをし、診療所へ引率しました。宮歯会報でも紹介





された京都府歯科医師会の診療車“すみこちゃん”の到着です。バス程の大きさで、車体の横に昇降口の着いた、見た目、エレガントで爽やかな印象を受けました。中にはモリタの足折れタイプのスペースラインが一台。駆動電源は一般家庭用と発電機の両方が使用可能に。驚いたのは、直ぐにでも診療を開始できるようにと、必要な器材・器具を満載しての到着だったことです。もう至れり尽くせりの気配りに、本当に感謝感激でした。見知らぬ京都府歯科医師会の皆さんにどれほど感謝したか分かりません。でも後で聞いたら、日本歯科医師会が手配してこのような運びになったとも聞きました。宮城に遅れて派遣されたこの診療車との出会い、今でも会えて良かった、この車で良かったとしみじみ思い出します。ご尽力いただいたであろう関係者の皆様方には今でも感謝しています。

落書きなんかさがされないよう駐車場の奥の院長宅に横づけにし、診療車の横にリフト付きの入口があるので、一体化して診療車を稼働させることにしました。院長宅の真ん中の6畳間が空いていたので、歩くと抜け落ちそうなボコボコの床板の部分をコンパネで補強し、急ごしらえの受け付け兼待合室として活用することにしました。待合用の椅子は3台。再会祝いのつもりで、温かいお茶をサービスすることに。TVもない殺風景な部屋でしたが、翌週9日から診療車での診療を開始することにしました。

仮設電話も付き、歯科診療車での診療を始めましたと市役所の方に伝えると同時に、旧鳴瀬町の人たちが避難している避難所回りもしました。宮戸小学校、縄文村、JR品井沼駅前のセンター、旧松島第4小学校、大塚の避難所、牛網学習等にも。移動手段がなく、皆さん、本当に不自由な生活をジッと耐えている様子は胸にジーンと応えました。

6月：6月に入った初日、TBCのラジオカーがインタビューに。何で来たの？近くの避難所にインタビューに寄ったら、バスで診療している歯医者があるよと聞いたものと、司会の荻野日亭南天さん。突然の訪問者に、ドギマギしながらもラジオの電波で宮城県中に診療車の宣伝をしてしまいました。帰る際に、南天さんと居合わせた患者さん、スタッフ達

とで記念写真。TBCのラジオカー、今でも県内をあちこち取材して回っていますが、南天ですと聴くと、この時のことが思い出されます。

診療が開始したといっても、ユニット一台では対応できる患者数も限られています。でも、診療車“すみこちゃん”は歯科の救急診療機能だけではなく、地域の交流の場とも思う存分活躍してくれました。噂を駆けつけて、あるいはラジオを聴いたと、それこそ毎日新しい患者さんが訪ねて来てくれました。座れる椅子がたった3台だけの汚れた待合室でしたが、お互いの無事を喜びあいながら、震災時の様子を語り合いながら新たな交流が生まれていきました。橋の上で一晩過ごしたとか、波に追いかけれながら逃げたとか、後片付けの最中に波が来て、流されたところが丘の上だったとか。目の前で渦巻く波に飲み込まれていく人もいたが、どうしようもなかったという悲惨な話も。あの大惨事の中では死ぬも生きるも紙一重だった。私たちは、ただ、神様に救われたただ、と。私が生きていることが分かっただけで安心したという方もいました。「いしのまき河北」で連載されている、3.11の生々しい個人体験を、来訪者の数だけ聞かせていただきました。そんな辛い過去を乗り越え、生活を再建するんだという熱い意気込みが伝わってきました。

7月：柿木の緑の木陰が診療車にしばしの憩い一時を与え、連日の猛暑にも、丈夫で長持ちの“すみこちゃん”は耐えてくれました。桜井建設の社長さんが8月1日再開できるようにしようと、具体案を提示、それに向けて診療所の改修工事は急ピッチで進行していきました。日曜日にも、また夜間ライトを点灯してまで工事を敢行してくれました。これを励みに、私たちもあと少しだと気合が入りましたが、暑かった。連日の猛暑には本当に参りました。クーラーを入れようとしたのですが、ユニットなど機械類に20A、エアコンにも20A必要で、とても被災したままの院長宅だけでは十分な電氣量を確保することができません。そこで、改修工事中の診療室の方から電氣を分けてもらうことにして、診療を継続しました。今はただ、懐かしく思い出されるだけですが、全身汗だくの毎日でした。流れる汗の分だけ回



復は早まるのだからと自分に言い聞かせながら。また、この地区の世話役の熱海区長さんが気を利かせてくれて、側溝や駐車場の草取りにボランティアを頼んでくれました。熊本の学習塾からきたという若い人たち、暑い最中に、蓋が壊れへドロで詰まってしまった側溝を綺麗に清掃してくれました。一人の若者、右の下顎が腫れている。どうしたの？来る前に歯が痛くて昨日腫れましたと。お礼に診てみるから車に入りなさいと診察。応急処置をし投薬。午後には平泉に向かうのですが大丈夫ですか？心配ないよ、明日には腫れもひくよ。本当ですか？どうだったんだろうか。

“すみこちゃん”での診療が順調に進んでいく中で、来院者の中から足がなくて買い物にも病院通いもままならないという声を聴く機会が多くなりました。震災前は、自転車もあり自家用車が3台もあるような生活を送っていたわけですから、それに比べたら雲泥の差がある今の生活、本当に不便な様子でした。とにかく早く診療所を再開することが地域住民のためになるとばかり思っていたが、果たしてそうなのだろうか。この場所に前のように診療所を再開しても、足のない人たちにとっては無いのと同じで、利用価値はないのではないか。生活圏内にあってこそ医療を受けることができ、その恩恵に浴することができるのではないかと。もっと生活者の身近な場所で提供できる医療体制が求められているのではないかと。そのためには何ができるのか。そんなことを思案しつつ、7月30日の「石巻かほく」に“8月1日から診療を再開します”と広告をだしました。それは又、3か月に及ぶ相棒“すみこちゃん”との惜別宣言でした。

8月：いよいよ待ちに待った、新装診療所での診療の開始です。来院される患者さんたちの開口一番は「綺麗になってよかったね」って。前のが30数年前の建物でしたから、今回の豹変ぶりは、本当に「綺麗」そのものです。真新しいユニットに腰掛ける患者さんたちを見てると、これで良かったのだとつい重い負担のことを忘れてしまいそうになりました。鳴瀬町立だった今の歯科診療所を町村合併の時に払下げを受けた際、銀行から借金をし、まだ返済し

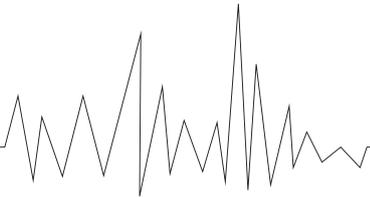
終えていないのに今回の震災。仕方なく改修費用にまた借金して、二重債務者になってしまいました。それでも、まだ仕事ができる職場があるんだから、仮設に入居している方々に比べたら恵まれているんだから頑張りなさいよ、と患者さんに励まされると妙に元気が出たりするものです。政府系金融機関に融資を申し込んだ時、年齢が年齢ですからと申請額の7割に減額されてしまい、ぎりぎりの線で予算を立てていたもので、結局資金不足。窓口収入が無いので手元にお金がありません。8月働いた分は11月の末にならないと入ってきません。だから、運転資金分も合算して融資を申し込んだのですが、その分がバツサリ削られてしまいました。仕方なく支払いを先延ばしにしてもらうことにしようと。

人を助けることで自分も助けられる。大学を卒業した時のような、医療の原点に立ち戻ったかのような新鮮な気分を味わうことができたのも震災のお蔭かもしれません。高齢臨床医の熟練した匠の技を見せようじゃないかと、自分自身を鼓舞し、また、不自由な生活を強いられながらも復興をめざし日々精一杯頑張っている住民との再会を心待ちにしながらの、もはや失うものなど何もない人生のラストランをスタートさせました。

終章：今回、被災して改めて人の真心に直に触れたような、人間として切り放せない「絆」のようなものを強く感じました。兄弟親戚は勿論のこと、歯科の業界団体、同窓会、同級生、学生時代の友人、先輩や後輩、患者さんや名も知らない人たち、行政関係者の方々と、実に多くの方々からの援助、激励をいただきました。人間って暖かいんだって、ひとりしみじみ感激もしました。そして、ふと思い出し、おもわず口ずさんだ歌があります。学生の時に流行った「若者たち」というフォークソングです。

戸君のいく道は希望へと続く 空にまた日が昇るとき 若者はまた歩き始める戸。暦年齢では若いとは言えないでしょうが、精神的には今、遅咲きの青春そのものです。

“私の後ろに道はない、私の前に道がある”



## 東日本大震災の経験

女川町 木村 齒科 木村 裕

3月11日震災のその日は普段と変わらず診療をしていました。2時46分に突然これまで経験したことのない、強烈な地震に襲われました。時間にして2分くらいだったのでしょうか、でもその時にはかなり長い時間揺れが続いたような気がしました。棚にあるものはすべて飛び出し、コンピュータは床に倒れ、窓ガラスも破れ、建物自体が倒壊するのではないかと思いました。患者さんが5名居ましたが、私も含め誰も動くこともできず、ただ床に腰を下ろして揺れが収まるのを待つことしかできませんでした。揺れが収まると同時に避難警報が町内に響き渡りました。女川町は何度か津波に襲われた経験があり、強い地震の後には津波が来るという意識は町民に浸透しており、避難訓練も毎年行われていたので、とにかく高台に避難しなければならぬと思いました。まずは患者さんを避難させ、その後二階の自室に戻り、貴重品を持って避難しようと思いましたが、部屋は本棚、テレビなどが倒れ、貴重品を探し出して持っていくのは時間がかかると思い、殆ど持ち出すことなく、半そでの白衣のまま、従業員を伴って高台に避難することにしました。すぐ目の前には海拔16メートルの高台にある、女川町立病院が避難場所としてあったのですが、あまりに強い地震で、少しでも高いところに避難したほうが良いのかなという思いが一瞬駆け巡り、車で1キロほど離れた女川町総合体育館に避難しました。避難直後はどの程度の津波が来るかは全くわかりませんでした。2階にある貴重品は後から持ち出せば良いだろうと思っていました。その日はかなり寒く、しかも半そでの白衣姿でしたので、しばらく車の中でラジオを聴きながら待っていました。そうすると地震が発生してから30数分たったころでしょうか、外から、ゴーっという音が聞こえてきて町の方に目をやると、女川町の中心部はどす黒い津波に覆われ、家や自動車はまるでおもちゃのようにぶつかりなが

ら浪間に漂っていました。ほとんどの建物は激流に呑まれ、4階建ての建物の屋根しか見ることができませんでした。この時になって初めてとんでもないことが起こったことを知るようになったのですが、私を含めその状況を見ていた町民の殆どは目前に起こっていることが信じられず、ただ茫然としていました。

その日の夜は、従業員と友人と一台の車の中でラジオを聴きながら眠れぬ夜を過ごしました。ラジオの放送でも情報があまり入ってないらしく、巨大地震に伴い大津波が発生し三陸沿岸に甚大な被害が発生したということしか放送されず、自分たちの周辺の地域がどのようなになったのかよくわからないままでした。時折外に出て町の様子を見に行きましたが、町は真っ暗で瓦礫と泥まみれでさながら原子爆弾投下後の広島のように地獄のような有様なのに対し、それとは対照的にその日の星空がとてもきれいだったのが印象に残っています。

夜が明けて、明るくなってきたときにまた町の様子を見に行こうとしたところ、何人かの人たちが「女川は完全に孤立しているから、歩いて石巻方面に行こう」と言う人たちが何人か集まり、従業員たちは皆石巻方面から通っていて、家族が心配だからと歩いて帰ることにしました。後で聞いたところ、帰る途中で何度も津波警報が出て、命からがら瓦礫





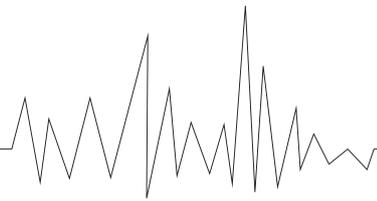
の中を歩き、数時間かけて家までたどり着いたそうです。私はそのまま体育館に残り、とにかく救護所の設営に取り掛かることにしました。当初体育館には二千人以上の人たちが避難しており、体育館内は入り口から廊下、階段まで、まさに足の踏み場もないほど人があふれていました。町の保健師さんたちと協力して体育館内の1室に柔道場から畳を運んできて、救護室を立ち上げると毎日100人以上の患者さんが押し寄せ、その対応に当たりました。はじめは医薬品も殆どなく、OTC（薬局で購入できる一般薬）で対処していましたが、それだけではどうにもならず、およそ1キロ離れた町立病院まで瓦礫の中を歩いて薬を調達し、対処に当たりました。女川町立病院は海面から16メートルの高台にあったのですが、その1階まで水没し病院の機能は麻痺状態になっていました。それでも病院の先生方やスタッフの方々はまさしく野戦病院のような状況の中で治療にあたっておられました。そのような状態でしたので、避難所の体育館には1日に1回、回診のようにして来て、重症者の様子を見ていただき、対処法や投薬の支持を仰ぐことが出来ましたが、先生方が帰られると、体育館の中には医師と名のつくのは私だけになり、すべての疾病に対処しなければなりません。当時はかなり寒い日が続き、特に夜間に老人の方々が体調を崩して救護室に搬送されることが頻繁にあり、夜中に人手を集めて瓦礫の中を病院まで運ぶか、救護室内で対処にあたるか選択をせまられ苦渋したことが何度もありました。また、透析を受けている方も何名かいたため、車、ガソリンの手配をどうするかなど、問題は山積で混乱状態でした。女川町は宮城県でも超高齢化が進んでいるところで、高血圧、糖尿病、狭心症などの患者さんが多く、救護室にいらっしゃる患者さんの多くはこのような病状の方々でした。私は大学で口腔外科を専攻していましたので全身管理は一応勉強はしていたつもりだったのですが、もう口腔外科の現場から離れて20数年も経っており、また、これだけ多くの患者さんを前にして本当に四苦八苦しました。そのほか風邪をこじらせた方、アレルギー一症状を訴える方、過換気症候群を発症した方など

がたくさんいらっしゃいましたが、幸か不幸か歯科に関する診療の希望は当初はほとんどありませんでした。また、震災直後は外傷患者もたくさん



いるのではないかと予想していましたが、今回の震災の被害はほとんどが津波によるものだったらしく、外傷で受診した方は、瓦礫の中を歩いてきたため、足に釘を刺した方、逃げるときに転んで、軽傷を負った方、避難所にいた犬に噛まれた咬傷が殆どで、私が見た範囲では、外傷で重傷を負った方は1名だけでした。震災後3日間は女川町は殆ど孤立状態で、外部の状況も良くわからず、また食料も殆どなく、強い余震も頻発、これから一体どうなるのか全く見当もつかず、寒さも厳しく眠れぬ夜が続きましたが、震災後4日目頃から自衛隊のヘリコプターが頻繁にやってくるようになり、これでやっと助かるのだなという安堵感を持つことが出来ました。

震災後、母、兄弟とも全く連絡がとれず、安否も不明でしたが1週間後によく家族の無事が確認され、震災から10日後車で町外へ何とかいける状態になりましたので、避難所で応急処置ができるような機材があればお借りしようと思い、まずは石巻歯科医師会に向かいました。石巻歯科医師会の拠点である石巻口腔センターも津波による浸水で1階は完全に水没し、床はヘドロまみれになっており、全く機能できない状態になっていましたが、古藤野先生、泉谷先生、鈴木徹先生、山本先生をはじめ、執行部の先生方がセンターに集まり、自らも被災されているにも関わらず、会員の安否の確認作業とセンターの機能回復に向けて尽力されていました。そこで、女川町の窮状を訴えポータブルユニットを借り受け、その後宮歯にも赴きました。宮歯では緊急対策班が組織されており、支援物資が用意されていたので、詰めるだけの機材、歯科材料を車に積んで、女川に戻り歯科診療にあたる準備を始めました。時間が経つにつれ、水、食料も十分とはいえな



いまでも配布されるようになると、まずは歯ブラシの配布から始めました。これは大学の支援の先生方や、ボランティアの先生方が訪れるたびに持ってきていただいたので、避難所を回り配り始め、2週間後にはかなりの方々に行き渡るようになりました。そのころから、ほちほち歯科に関する患者さんが増えてきました。まずは入れ歯を無くした、あるいは流されてしまって困っているという方がかなりいらっしゃるようになりました。当初は道具材料共に十分はなく、技工所とも連絡がとれなかったので、どうしようか考えた挙句、手元にあったオストロンを使って、咬合床を作り、それに口腔内で若干の手を加えて即席の義歯を作り使っていただきました。その後仙台の藤先生からエルゴプレスを使って基礎床を作る方法を教えてもらい、機材まで提供していただき試してみました。時間が経過するにつれ徐々にPer,Pulなど一般的な歯科治療の要望も増え、材料や機材もできるだけ揃えてゆきました。4月下旬ころからは技工所とも連絡がとれ、まがりなりにも、ほとんどの治療ができる体制になり診療を続けましたが、暫くの間パイプ椅子や、介護用の椅子を使って診療にあたっていたため、無理な姿勢を続けることが多く腰を痛めてしまい、かなり苦しい時もありましたが、その後、中古のデンタルチェアを宮城県歯科医師会より手配していただき、これぞいぶん楽に診療ができるようになりました。このような状態で震災の翌日から10月いっぱいまで診療活動をしていましたが、この間、石巻歯科医師会、宮歯、同窓の先生方やボランティアの先生方の物心両



面で多大なるご協力をいただき、この誌面をお借りしましてお礼申し上げます。

11月1日には念願の仮設歯科診療所が開設され、現在に至っております。この仮設診療所の開設に当たりまして、宮歯、石巻歯科医師会の先生方には多大なるご尽力をいただきました。

この震災に会い私が体験した範囲で、考えさせられたことはいくつかありますが、思いついたことを以下に挙げてみます。

- 1、このような非常時に遭遇した場合、家族は勿論人とのつながり、人間関係がとても大事なことを実感しました。避難所の患者さんに会うと、お互いの状況を話し合ったり、励ましたり励まされたり、それだけでもとても心強く感じられましたし、従業員、友人や役場の方々などの協力が得られなければ一人でできることは本当に限られたものになっていたと思います。
- 2、避難所の救護所にいた時に、多くの方々から、親族の遺体確認をしてほしいと頼まれました。ところが私の診療所は完全に跡形も無くなり、カルテは勿論、チェア、コンピュータ、レントゲン装置もどこへ行ったのやら。診療所周辺を何日も探してみましたが、全く見つからず、照合する資料が何一つなくなっていました。遺族の方々の中には、歯科医が歯型を見ればすぐに身元が分かるものだと思っている方もおり、事情を説明してもとにかく見てほしいと頼まれ、御遺体の口腔内を見させていただきましたが、勿論身元の確認はできず、遺族の方々には申し訳なく、また自分としてもとても歯がゆく残念な思いをしました。ただ、御遺体の中に義歯が装着されている方もおり、この時、義歯に名前を入れておけば重要な身元確認の情報になると思いました。現在はすべての義歯に名前入れを行っております。勿論これが役立つことが2度と起こってほしくはないのですが。
- 3、避難所の救護所でまず最初に必要になることは今回の場合は、心疾患、高血圧、糖尿病などの全身疾患の患者さんの処置でした。女川町の場合は孤立して、私が居た避難所には医師が数日間なか



なか来れなかったという、特殊な事情がありましたが、これら全身疾患についての知識を常に持っておいた方が良いと思いました。全国高齢化社会が進んでおり、このような状況になった場合、歯科医師も何らかの形でかかわることがあるかもしれません。

4、今回の災害で私の置かれた状況においては、震災直後に歯科治療を希望する患者さんはそれほど多くはあまりありませんでした。しかし時間が経過するにつれ、歯科治療の需要がどんどん増えてきます。今回の場合、最初のうちは痛み止め、抗生物質の投与だけの処置しかできず、特に義歯関係の処置はレジンなどの材料とエンジンが無ければどうしようもありませんでした。幸い石巻歯科医師会、宮歯からこれらの物資を提供して頂

き、暫く経ってからではありますが、治療にあたる事が出来ました。ただ、このように広範囲に災害が起こった場合、これらの機器の数が十分にあるのだろうかと思いました。災害時にどんな患者さんが多いのか、そのための材料、薬剤、道具、機械などの整備と備蓄が必要なのではないかと思いました。

以上これまでの経緯を記憶をたどって書いてみました。このようなことが二度と起こってほしくはないのは言うまでもありませんが、もしもの場合の参考になればと思います。最期にここには書ききれないほど多くの先生方にご協力を頂きました。お名前をすべてあげることはできませんが、この誌面をお借りしまして、重ねてお礼を申し上げます。



大崎歯科医師会

## 大崎歯科医師会震災活動報告

社団法人大崎歯科医師会 会長 戸田 慎治  
社団法人大崎歯科医師会 広報担当理事 千葉 昌一

### 大崎地区被害の概況

大崎地区は、ここ10年で、3度の震度6を観測する地震に見舞われている。平成15年5月三陸南地震、同年7月宮城県連続地震、平成20年岩手・宮城内陸地震。これによって涌谷町、美里町、大崎市東部、西部は大きな被害を受けてきた。今回の地震では家屋倒壊などによって6名の死者、376名の重軽傷者をはじめ全壊・大規模半壊1106棟、半壊2952棟などこれまでに体験したことのない被害を受けた。さて、歯科医院の稼働状況だが、加美地区や大崎市西部では断水期間は短く、電気の復旧は14日から次第に進み16日には診療可能な歯科医院が大崎市災害FMや大崎市HPでアナウンスされている。しかし、診療を再開するまで、震災発生から1週間目が19.6%、2週目が47%、3週目が25.5%と地区全体が回復するまではかなりの時間を要した。停電によって会員間の連絡がとれず、組織的活動が可能になるのは電気が復旧するのを待たなければならなかった。ライフラインの復旧、自院の診療体制が整わない中宮城県歯科医師会から要請を受けた検案活動に、大崎歯科医師会では約半数の会員が参加した。

### 隣接被災地石巻地区の状況

3月20日震災から9日目、大崎歯科医師会地域医療委員会委員長の川村洋と委員の駒形貴は検案を手伝うため自衛隊の車両や被災地に向かう多くの中にはさまれながら、目的地石巻へと向かっていた。カーラジオは生活情報や被災状況を伝えていた。市内に入ると道端には積み重なった車、瓦礫がいまだに散乱している。多くの警察車両が停車している旧青果市場に到着。そこで川村らは、石巻市内の歯科医院は3軒しか稼働していないことを聞き、避難さ

れている方々がどのように過ごされているのか、避難所の現状を視察することにした。まず1000人規模の避難所であった石巻中へと向かう。そこで今回の活動を決定づける出来事に遭遇する。避難していた若い女性に、ちょうど着ていた「大崎歯科医師会」と書かれたジャンパーを見て「歯医者さんですか？夕べから母が歯が痛いといっているのですが……」と声をかけられたのである。とりあえず、偶然持参していた鎮痛剤を手渡した。どうやら避難している方々に歯科的な要望がでてきたのでは……という感覚を覚えたという。その後石巻高校、石巻女子高、石巻市市役所に廻るとそこでもジャンパーの「大崎歯科医師会」という文字を見て、「歯が痛くて……近隣で診療している歯科医院を教えてください」と声をかけられる。やはり歯科的な要望が出ている時期だと確信を持った二人は診療可能な場所をもとめて石巻歯科医師会口腔保健センター、東松島市と巡回した。その間に、石巻市市役所では100ヶ所を越える避難所リストをもらったものの1000人以上の避難所は20ヶ所を越えており、あまりに膨大な人数とその範囲に呆然としながらも活動が可





能な場所を探した。古藤野石巻歯科医師会会長のご理解もあり、活動拠点を石巻中学校に開設することとなった。これと並行して県歯理事の前原雄二（現専務理事）がふたりと連携し、県歯科医師会に緊急支援物資が届き始めていることや在庫があることを確認。同時に活動を開始する。その後ふたりは戸田慎治大崎歯科医師会副会長（現会長）に会い石巻地区の現状を報告、石巻歯科医師会執行部との調整、大崎歯科医師会内の調整、各企業への支援物資提供協力の働きかけなどを依頼し、翌21日から活動を開始することとなった。

### 門脇中大崎歯科医師会被災者診療所設置

3月21日震災から10日目。大崎歯科医師会に備蓄されている薬品、歯科器材および在宅往診用ユニット2台など被災者仮設歯科診療所を開設するべく石巻中学校へ搬入した。そこでは同日到着した兵庫県医師会会長の仮設診療所と同室となり、宮城県歯科医師会から資材を調達してきた前原先生が合流し挨拶を交わすこととなった。早速地域医療委員会委員津野田をはじめ6名で避難者の歯科的要望について口腔ケアの重要性を話しながら、聞き取り調査を行った。しかし部屋が狭かったことと断水していたことが足かせとなり、翌日3月22日には電気・水が使用可能な隣接の門脇中学校へと仮設診療所を移設することとなった。この日、大崎歯科医師会被災者診療所（所長戸田慎治）を開設。開設期間は地区歯科医院の診療開始が見込まれる1週間を予定した。



### 活動実績とその内容

最大の目標は避難者の健康支援、震災関連死割合の低減であり、この活動にはボランティアスタッフを含め延べ100名以上が参加した。

その活動内容は、口腔衛生啓発ポスター貼付・リステリンボトル（口腔洗口剤）の設置・歯科治療と口腔衛生の校内アナウンス・運営者への口腔衛生指導・避難者への口腔衛生指導、生活指導、情報収集・運営者へうがい用水の使用要請認可・水がないところでは口腔ウエット、噛むことを目的としたむし歯予防ガムの配布・介護食の提供・仮設歯科診療所への搬送、往診（摂食障害のある方を医療班へ引き継ぎ）など避難者の環境を心がけ対応した。また歯ブラシの配布・うがい薬、入れ歯洗浄剤、ペーストの配布などを行う場合は、その状況に見合った指導、対応や助言を行うように心がけた。

この活動がスムーズに行えたのは、3月18日に大崎歯科医師会の検案活動や被災地活動への支援を大崎市に要望したことに対して、大崎市が支援活動の一端として被災地支援車両に供給していたガソリンの一部を大崎歯科医師会にも優遇措置として供給してくれたことが大きかった。加えてこれまで築いてきた石巻歯科医師会と大崎歯科医師会との密な交流があったのも大きな要因のひとつである。そして何よりも検案や歯科ボランティアなどそれぞれの支援活動に対して、大崎歯科医師会の会員が一致団結して協力を惜しまなかったことが最大の要因であったと考えられる。

3月22日～27日の活動実績としては歯科診療受診者78名、口腔衛生活動対象者（避難所収容人数累計）



約5500名（対象避難所、門脇中学校・石巻中学校・石巻高校・住吉中学校・鹿妻小学校・渡波小学校・湊小学校・稲井中学校（要介護者重度）・遊楽館（要介護者中軽度））であった。



### 大崎地区の支援活動

その後まもなく大崎地区内にも鳴子温泉地区などに一時避難所が開設され3月30日～8月31日まで鳴子地区45ヶ所、美里町3ヶ所、色麻町1ヶ所、加美町1ヶ所、涌谷町1ヶ所の計51ヶ所の1,300人を対象に、各避難所で不足している口腔衛生用品の要望をふまえ、随時支援物資を配布、お口の健康相談、近隣歯科医院への紹介・往診依頼を実施した。

### 大崎歯科医師会雄勝大須ボランティア診療所

4月に入り石巻地区でも支援が手薄で、かつ医療は日赤他民間支援レベル、また継続的な支援距離として適当である場所として「雄勝地区」の情報が聞



こえてきた。

4月10日川村と前原が現場視察に「雄勝地区」を訪ねた。この地区は医療機関が全て流失し歯科医療もなくなっていた。しかし地区で活動していた医療チームに話を聞くと歯科的な要請はいままで特にはなかったとのことだった。二人は引き上げるつもりで、かつて縁があった同地区、大須の海を見ながら昼食をとり、帰ろうとすると大須地区の方に呼び止められた。聞けば義歯が破折して困っていたらしい。やはり「大崎歯科医師会」のジャンパーを見かけて声をかけたらしかった。よく話を聞くと、この地区の人たちは道路事情も悪く移動手段がないため歯科治療を希望している人が大勢いるということであった。雄勝地区では被災人口約1000名のうち半数がこの大須に居住しており、中心部はほぼ壊滅状態だった。しかし、半島の先端である大須は被害を免れておりライフラインは絶たれていたが、住居は維持されていることを知った。この地区での特徴的なものとして、震災以前から口腔内に異常を感じていながら患者本人が対処していた状態が、物資（入れ歯安定剤など）が入らなくなったこと、水がなく衛生状態が悪化したことにより対処しきれなくなったケースが少なくなかった。通常の生活のなかでも義歯調整等のリハビリや歯周処置、予防の考え方はほとんどなく、地理的不便さから通院の煩雑さは理解されにくい状況にあった。そこでいきなり口腔衛生の話を理解していただくとしても、受入れは難しくやはり治療からの延長で意識の変化を期待するのが現実的だと考えられた。そこでこの話を歯科医師会に持ち帰り検討した結果、「大崎歯科医師会雄勝大須ボランティア診療所」を立ち上げることになった。期間は4月29日～7月31日の日曜、祝日、午前8時～午後1時とし、活動日数は13日間であった。患者数はのべ107名。参加者は大崎歯科医師会会員歯科医師10名、スタッフ6名、医師1名、東北大歯科医師4名であった。



## 登米市歯科医師会

# 東日本大震災による登米市の被災状況

登米市歯科医師会 会長 安藤 良彦

今回の震災で登米市は死者・行方不明者26名、負傷者51名の人的被害、住家の全壊190棟、大規模半壊335棟、半壊988棟、一部損壊3101棟などの被害を受けた。避難者は南三陸町からも大勢あり、ピーク時には市内の避難者も含めて6230名に達した。市内の全ての歯科医療機関が診療停止の状態となったが、臨時歯科診療所を設置し、医療の空白を埋めるべく活動を開始した。会員安否、救護、身元確認、支援についての活動概要を報告する。

## 会員の安否確認

発災時より停電が発生し、テレビ、固定電話が使用不能となった。唯一ラジオの情報がたよりとなった。携帯電話が重要な通信手段となったが回線がつかず、当日夜間には基地局の電池切れのせいかメールも使用できなくなった。店はコンビニのみ懐中電灯の灯りで営業していたが、電池は既に売り切れていた。ガソリンも不足し、手に入りにくく、会員の安否確認は、自転車、バイクが役に立った。1名の会員と連絡が取れない状態であったが、自宅、診療所とも外観からは重大な損壊は認めない状態であり、のちに無事が確認された。

## 救護活動

発災から停電、断水が続き、市内の歯科診療所はすべて診療不能となった。診療の空白を食い止めるため3月13日電源のある市立病院を訪ねた。DMATや国際的支援団体に混雑していたが、病院長に耳鼻科外来使用を許可していただいた。14日から前川先生を中心に輪番で第一臨時診療所として17日まで9時から17時までの診療を行なった。

さらにガソリン発電機が手配できたので3月15日、16日とおおさか歯科医院に第二臨時診療所とし

て開設した。18日には電気、水が回復し、多くの歯科医院が診療を再開できる状態となり、臨時歯科診療所は閉鎖された。

各臨時診療所での患者数と診療内容を資料1に、使用品を資料2に記載した。なお、いずれも登米市歯科医師会の無料のボランティア活動として行なった。

3月22日気仙沼支部より救護の依頼があった。気仙沼、栗原、登米の3支部で協議した結果、被害の大きかった南三陸町の3つの仮設診療所のうち、手薄になる戸倉地区の避難所で救護活動を行なうこととなった。南三陸町で診療所を失った佐藤長幸先生をサポートし、栗原の小田島会長、登米の大坂副会長がデンタルユニットを搬入し、私財を供与し7月末まで任にあたった。

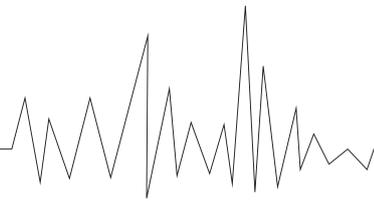
## 身元確認

3月20日宮歯より身元確認、デンタルチャート作製の依頼があり、登米支部では3月22日より二人一組体制で栗原支部と合同で作業に従事した。検視場所は南三陸町のベイサイドアリーナや気仙沼市面瀬小などであった。派遣予定表を資料3に示した。発災から長時間経過した時点での作業では任務とはいえ辛い作業で、ストレスを感じた模様である。

## 支援活動

3月14日、登米支部会員の高橋俊治先生より供与されたハブラシ3500本、紙コップ、デンチャー保管容器の一部を避難者の多かった迫町体育館に持参し、避難所の担当職員より配布してもらった。残りを登米市健康推進課の職員に委託し各避難所に配布した。

3月18日、宮歯理事佐藤昭博先生が宮歯から預か



ったマスク、粉ミルクなどの支援物資を、登米市健康推進課を通じて適所に配布した。

3月24日、登米支部から宮歯に請求した支援物資の一覧を資料4に示した。担当副会長の高橋利光先生が歯科衛生士会と連携し、支援物資を必要に応じ避難所に随時配布した。会員を通じ迫町の小規模な避難所へハブラシ、デンチャー保管容器などを配布する活動を行なった。避難所の厳しい環境下では、震災で受けたダメージに加え、精神的なストレスも多く、口腔環境の劣化をまねき肺炎を惹起する人の多いことを阪神淡路大震災で学んだ。登米支部でも避難所における口腔ケアの必要性を感じ、登米市健康推進課にその旨を知らせ、ニーズの把握を打診した。避難者の生活の場が避難所から仮設住宅へ移行しているが口腔ケアの必要性に鑑み、12月から気仙沼支部会と協調し、市内の仮設住宅への訪問口腔ケア指導を実施する運びとなった。長期にわたる根気強い取り組みの必要な活動と予想される。

## 総括

あらゆる備えを超越した未曾有の震災であった。県のレベル、歯科医師会のレベル、地域の各レベルで防災訓練を経験しながら、震災の現実には、いささか無力であったといわざるを得ない。行動を決定するための情報不足、それでも行動しなければならぬ切迫感、あせり、指揮系統の不統一、部門間の連携の不徹底など今後改善すべき反省点が多く認められた。今回活動を期待された登米市歯科医師会会員すべてが被災者でもあった。報告者も住家が大規模半壊となり、電話、ファックスが使用できない状態となり診療所のユニットの脇で余震に怯えながら就寝した。入浴できたのは10日後のことであった。そのような環境下では、客観的に見れば様々な評価はあろうが、期待される責務について、登米市歯科医師会として、できる範囲で努力はしたとの実感は会員各自有しているものと思う。

### 資料1

## 東日本大震災における登米市歯科医師会臨時歯科診療所活動報告

開設場所：第一臨時診療所 市立佐沼病院内（耳鼻咽喉科外来）

第二臨時診療所 中田町 おおさか歯科医院内

開設時間：第一臨時診療所 3月14日～3月17日 9時～17時

第二臨時診療所 3月15日～3月16日 12時～15時

活動内容：

第一臨時診療所

	14日	15日	16日	17日	合計
受診者数	7	8	7	8	30

治療内容（延べ人数）

レントゲン撮影 6（佐沼病院放射線科の協力により行いました）

投薬治療 18

単治 4

歯内療法 6（麻抜4、感染根治2）



再装着	2
外科処置	3 (抜歯2、膿瘍切開1)
診察のみ	5 (蜂窩織炎で大崎市民病院に転院入院1)

## 第二臨時診療所

	15日	16日	合計
受診者数	7	4	11

## 治療内容 (延べ人数)

投薬治療	5
単治	3
歯内療法	1 (麻抜1)
義歯修理	2
外科処置	2 (膿瘍切開2)
診察のみ	2

## 資料2

## 使用消耗品

薬剤：メリアクトMS錠100mg	108錠
メリアクトMS小児用細粒10%0.5g	6包
ケフラールカプセル250mg	36錠
ファロム錠200mg	9錠
ジンペイン錠75mg	9錠
カロナール錠200mg	80錠
カロナール錠300mg	7錠
ロキソニン錠60mg	33錠
ロルカム錠4mg	14錠
2%キシロカイン (E) 1.8ml	10本
精製水	20 L

## 参加協力者

赤沼整、安藤良彦、大坂博伸、後藤孝博、佐藤敬喜、佐藤敬、高橋利光、高橋義文、千葉明宏、原敬、前川理人、宮本弘平  
 おおさか歯科医院スタッフ、中江歯科クリニックスタッフ  
 及川やす子 (市立登米診療所)  
 岩淵充洋 (仙北歯研)

## 資料3

## 身元確認検視担当表（登米、栗原市歯科医師会分）

日付	担当者（登米）	担当者（栗原）
3/22（火）	高橋利光、櫻田素雪	
23（水）	前川理人、櫻田素雪	
24（木）	安藤良彦、佐藤 敬	
25（金）	大坂博伸、千葉 晃	
26（土）	高橋俊治、浅野正巳	
27（日）	高橋義文、王 瑞銘	笠間隆三、中嶋あつ子
28（月）	原 敬、 宮本弘平	
29（火）	高橋義文、櫻田素雪	
30（水）		笠間隆三、小野寺滋也
31（木）	佐藤敬喜、櫻田素雪	

集合場所 登米町高橋歯科医院

集合時間 12：00 現地には、緊急車両の指定を受けた車で向かいます（乗り合い）

検視場所 南三陸町ベイサイドアリーナ

検視時間 13：00～終了まで（その日によって異なりますが16～17時まで）

現場責任者 志津川警察署 地域課 斎藤巡查

\* 担当者は総合受付で用件を言うと斎藤巡查を紹介してくれます。

## 登米市歯科医師会 検視班 名簿（4/1宮歯提出分）

○ 検視班 基本的に1チーム2人

宮歯より要請があった場合に対応します。 4/8は要請無し

検視班の先生は、要請があれば救護班参加も可能です。

日付		
4/3（日）	}	
6（水）		
7（木）		
8（金）		栗原市歯科医師会担当
9（土）		
10（日）	}	
13（水）		高橋利光、前川理人
14（木）	浅野正巳、佐藤敬	
15（金）	中止	
16（土）	高橋俊治、佐藤敬喜	
17（日）	櫻田素雪、宮本弘平	



## 登米市歯科医師会 救護・検視 担当者（4/1宮歯提出分）

### 1. 救護担当者

宮歯より要請があった場合に対応 4/3、4/4は要請無し

日 付	
4/3（日）	江川元徳、高橋俊治、太田富之
4（月）	江川元徳
7（木）	後藤孝博、佐藤昭博、佐藤光久
8（金）	佐藤利朗
10（日）	江川元徳、太田富之、笠間隆三、笠間八十公
11（月）	江川元徳
12（火）	佐藤利朗
13（水）	佐藤志津彦、佐藤利朗
14（木）	後藤孝博、太田富之、佐藤光久
15（金）	佐藤利朗
16（土）	佐藤昭博
17（日）	江川元徳、太田富之

### 2. 検視担当者

宮歯より要請があった場合に対応 4/3は要請無し

検視が可能な先生は、必要なら救護も可能

日 付	
4/3（日）	布施孝之、王瑞銘、高橋利光、浅野正巳、櫻田素雪、宮本弘平
6（水）	高橋利光、前川理人
7（木）	安藤良彦、大坂博伸、佐藤敬、小寺正克
8（金）	大坂博伸、千葉晃
9（土）	布施孝之、高橋義文、浅野正巳、前川理人
10（日）	安藤良彦、高橋義文、高橋利光、浅野正巳、櫻田素雪、佐藤敬、宮本弘平
13（水）	高橋利光、前川理人
14（木）	大坂博伸、浅野正巳、佐藤敬
15（金）	大坂博伸、千葉晃
16（土）	佐藤敬喜、前川理人
17（日）	安藤良彦、高橋利光、櫻田素雪、宮本弘平

#### 【参考】 3/21～3/31検視担当者

3/21状況を把握するため現地視察 高橋利光、前川 3/22高橋利光、櫻田

3/23前川、櫻田 3/24安藤、佐藤敬 3/25大坂、千葉晃 3/26高橋義文、浅野

3/27笠間隆三、中嶋あつ子 3/26原、宮本 3/29高橋俊治、櫻田

3/30笠間隆三、小野寺滋也 3/31佐藤（敬）、櫻田

資料4

【日付】	【支部名】	【診療所名・会員名】
3月 24日 (木)	登米支部	

救援物資依頼書

配送先	高橋歯科医院				
連絡先	登米町寺池日子待井25-1	TEL	0220	( 52 )	3210
連絡事項					

口腔清掃関係

歯ブラシ	歯ブラシ(子供用)	義歯用歯ブラシ	歯間ブラシ	スポンジブラシ	リステリン(250ml)
1,000 本	本	本	個	1,000 個	個
歯磨剤	歯磨剤(子供用)	義歯洗浄剤	オーラルバランス	義歯保管ケース	
個	個	4,000 個	個	300 個	

薬品

ロキシニン (100錠)	カロナール (100錠)	クビット500mg (100錠)	ジスロマック250mg (60錠)	メアクト小児用細粒 (120包)	メアクトMS錠 (100錠)
2 箱	4 箱	1 箱	箱	2 箱	10 箱
アフダゾロン	ネオステリングリーン	ペリオクリン (5本)	ケナログ	ディスポ注射針 (100本)	ウェルパス
本	個	10 箱	個	1 箱	2 本
ヒビテン	消毒用アルコール	キシロカインカートリッジ (50本)	オクタプレシン (50本)	洗浄 イソジン	
2 本	10 本	1 箱	1 箱	2 本	

診療関係

グローブL	グローブM	グローブS	グローブSS	診療用マスク	デイスホミラー・探針・ピンセット
箱	4 箱	箱	箱	2 箱	200 セット
外科治療セット	根管治療セット	義歯治療用セット	義歯安定剤	ディスポエブロン	ウエットティッシュ
セット	セット	セット	個	200 枚	4 個
ティッシュペーパー	ガーゼ・ワッテ・ロールワッテ (100入)	紙コップ	タオル		
個	4 セット	200 個	枚		

その他




栗原市歯科医師会

## 栗原市歯科医師会活動報告

栗原市歯科医師会 広報担当 菅原 智弘

### 1. 臨時歯科診療所設置について

大震災による停電・断水のため栗原市内全歯科医院が休診せざるを得なかった状況に鑑み、支部会長小田島が栗原市役所市民生活部長兼福祉事務所長小澤敏郎（当時）氏に掛け合い、志波姫総合支所内に臨時歯科診療所を設置する運びとなった。

[設置場所] 栗原市志波姫総合支所  
この花さくや姫プラザ歯科診療室

[設置期間] 3月15日(火)、3月16日(水)  
午前10時より午後4時まで  
3月17日(木)

午前10時より正午まで  
※17日昼には市内数軒の歯科医院が  
復旧したため、臨時歯科診療所は閉  
所した。

[協力会員] 小田島正博<sup>1)</sup>、庵原誠一、  
近藤公一郎<sup>1)</sup>  
※<sup>1)</sup>の歯科医院においては勤務医の先  
生およびスタッフの方々にも参加  
していただいた。

[実施状況]

受診者数(人)	15日(火)	16日(水)	17日(木)
築館		2	2
若柳		1	2
栗駒		4	1
高清水		1	1
一迫		1	

瀬峰		1	
鷲沢		2	1
金成		1	
志波姫	1	2	
花山			
市外			
計	1	15	7

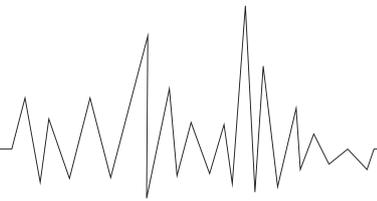
※診療内容は、そのほとんどが腫脹であった。  
処置はsp、投薬など。

[考察]

- 1) 臨時歯科診療所設置を承認されたのが14日(月)午後8時だったため、翌15日(火)より広報紙等で周知を計ったものの、患者の出足は鈍かった。
- 2) 栗原市内にある十の総合支所のなかで唯一歯科診療室をもつ志波姫総合支所内に緊急歯科診療所を設置できたことは不幸中の幸いだった。この歯科診療室内には中古ユニット1台(配管設備ナシ、照明とリクライニングは可)があり、歯科健診、歯科相談、健康教室などで活用されていた。したがってポータブルユニットを運び込み、自家発電が用意できれば、直ちに歯科医療を提供できたのである。
- 3) 中古ユニットは、志波姫開業小田島がユニット買い換えのときに出た旧機を旧志波姫町に無償譲渡したものだ。15年程前の話である。

### 2. 検案歯科医師派遣について

大震災がもたらした未曾有の検案数により、身元



確認作業についての派遣要請が当支部にも宮歯よりあった。当支部は地理的に最も近い南三陸ベイサイドアリーナ56での検案に協力することになる。

[派遣期間と派遣歯科医師数]

第1期 3月20日(日)～4月9日(土)

派遣歯科医師数 延べ31名

第2期 8月18日(木)～9月29日(木)

派遣歯科医師数 延べ5名

※ベイサイドアリーナ以外にも、旧飯野川高校(4月4日/2名)および石巻上釜ふれあい広場(8月18日/2名、9月11日/1名)での検案に参加した。

[協力会員] 近藤公一郎<sup>1)</sup>、三澤公夫<sup>1)</sup>、熱海順、阿部照彦<sup>1)</sup>、小田島正博、鹿野泰志、中嶋あつ子、山田良和、庵原誠一<sup>1)</sup>、熱海啓一、大津昌弘、小野寺滋也、笠間隆三、加藤宗伸、加藤正人、川井一行、鈴木篤、鈴木尚之、太宰三男

※<sup>1)</sup>の歯科医院においては勤務医の先生方にも参加していただいた。

### 3. 南三陸町における医療救護支援について

被災された沿岸部の先生方におかれましても、当該避難所での歯科応急処置活動は参加できる場合が多いので、支部会としては、あくまで後方支援の形で協力することとした。3月中はガソリン不足による大混乱のため、動ける者が自主的にベイサイドアリーナでの急患対応に参加していたが、3月26日(土)支部会長小田島が気仙沼支部および登米支部と協議し、4月より「志津川海洋自然の家」での志津川佐藤長幸先生の後方支援にあたることになった。

[南三陸町ベイサイドアリーナにおける医療救護支援]

3月17日(木)～3月30日(水)

支援歯科医師数 延べ8名

[志津川海洋自然の家第5研修室における医療救護支援]

4月1日(金) 歯科材料搬入

4月5日(火) ユニット設置

4月6日(水)～4月30日(土)

支援歯科医師数 延べ12名

5月27日(金) 栗原支部による支援を終了する。

[協力会員] 近藤公一郎<sup>1)</sup>、小田島正博<sup>2)</sup>

※<sup>1)</sup>の歯科医院においては勤務医の先生方にも参加していただいた。またベイサイドアリーナにて移動診療車の貸与(3月17日～3月30日)もいただいた。

<sup>2)</sup>の歯科医院においては勤務医の先生方およびスタッフの方々にも参加していただいた。

### 4. 栗原市被災地支援プロジェクト医療ワーキンググループ(庶務/栗原市役所医療局医療管理課)活動の一環としての口腔ケア支援活動『避難所におけるお口の健康づくり支援』について

栗原市は、4月3日(日)に南三陸町からの被災者193名(77世帯)を栗原市内6ヶ所の避難所に受け入れ、引き続き4月6日(水)には第1回医療ワーキンググループ会議を開催した。支部会長小田島はこの会議に副座長として参加し、栗原市歯科医師会は被災者の口腔ケアを担当することを表明した。活動内容は支部会地域保健医療担当庵原誠一と市役所市民生活部健康推進課歯科衛生士佐藤明美氏が協議決定した。

※4月3日(日)から当分の間は、歯痛や義歯喪失などで緊急を要する被災者について、市の避難所スタッフが各避難所最寄りの歯科医院を紹介して治療を受けていただいた。

[口腔ケア支援活動内容]

- ① 歯科健診(通常健診・歯周病健診)
- ② 個別歯科相談(歯ぎしり・義歯適合など)
- ③ パンフレット・歯科用品配布



## [実施状況]

避難所名	実施日	協力会員	対象者数
金成延年閣	6月16日(木)	千葉 健 <sup>1)</sup> 、加藤宗伸	7人
若柳ウェットランド	6月16日(木)	庵原誠一 <sup>1)</sup> 、中嶋あつ子	11人
一迫老人福祉センター	中止	—	—
栗駒みちのく伝創館	6月16日(木)	太宰三男、岩渕真理子	5人
花山青少年自然の家	6月16日(木)	久我孝徳	4人
花山石楠花センター	6月16日(木)	久我孝徳	4人

※<sup>1)</sup>の歯科医院においてはスタッフの方々にも参加していただいた。

## [考察]

- 1) 被災者の口腔状況把握のために、まず質問用紙を5月9日(月)に配布、16日(月)に回収、集計した。質問紙は日本歯科医師会作成の『口腔保健質問紙調査票(初回)』である。しかし実施日までにはさらに1ヶ月のタイムラグがあったため、一部の相談希望者はすでに避難所を退所していたり、すでに近隣歯科医院に通院していたり、あるいは諸事情で日中不在だったことで、口腔ケア支援活動の利用者は少なかった。
- 2) 当初、被災者は少なくとも3ヶ月から1年程度避難所に入所していると考えられていたため、口腔ケア支援活動も長丁場になると思われた。したがって市側の要望は、毎月1回第3木曜日に各避難所にて歯科健診・歯科相談を少なくとも3ヶ月連続で行ない、その後は様子を見て減らしていくという話だったが、実際は南三陸町での仮設住宅建築が進み、そちらに移動する方や、また民間の賃貸住宅入居のため退所される方が増えたため被災地医療支援活動もしだいに低調となり、8月30日(火)第2回ワーキンググループ会議をもってプロジェクトは終了したのである。



気仙沼歯科医師会

## 震災後9ヶ月の復旧状況と今後の課題

気仙沼歯科医師会 会長 菅野 健

3.11の東日本大震災から、間もなく9ヶ月が経とうとしていきます。気仙沼支部（気仙沼市と南三陸町）は震災により大きな被害を受けましたが、その被災地の歯科医療とそれを担う支部会員の現状をお伝えします。

全ての医療機関が全壊した南三陸町は、未だ復旧とはほど遠い状況ですが、10月末に2件の仮設歯科診療所が開設され、やっと地域歯科医療の第一歩を踏み出しました。気仙沼市では、かなりの数の歯科医院が診療を再開し、震災前の歯科医療サービスの提供に回復しつつありますが、被害の大きかった市南部の大谷地区に仮設歯科診療所を開設する予定が来年1月までずれ込み、未だ開業できないままです。

当支部では、医療機関が集中していた沿岸部は、地震による地盤沈下と津波の被害により建築規制

が解除されず、土地のかさ上げが完了する数年先まで現地再開が不可能な状態が続くと思われまます。さらにテナント開業の会員が殆どいないため、被害は建物・機材のみではなく土地にまでおよび、長期の休業による所得の喪失も含め、損害額は甚大なものとなっています。現地では、修繕・新築が殺到し、職人不足のため着工・完成が大幅に遅れたうえ、建築用地も不足し、そのコストも震災前の2倍以上とされています。

国や県の支援制度による補助金や助成金は、複雑な手続きと現地との情報の乖離によってか、未だにそのほとんどが支払われておらず、被災会員の自己資金によって地域住民への歯科医療サービスが賄われているのが現実です。

関係各位の献身的な御努力に深く感謝していますが、今回の東日本大震災は現代日本が被った最大



大谷診療所と住宅（左側）



大谷診療所（全景 正面）



水没した歯科診療台



事務室



診療室



休憩室



の津波災害であることを鑑み、先ず現在の支援制度の有機的な運用と、地域医療の維持・確保のために長期的・現実的な支援を切望するところです。



正面玄関



西側からの診療室



南側からの診療室

## 東日本大震災南三陸町

気仙沼歯科医師会 副会長 南三陸町 小野寺 勉

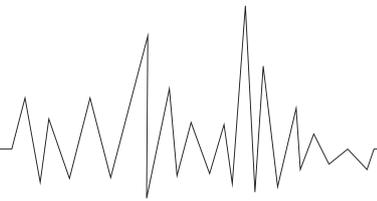
3月11日激しい揺れとゴーと言う音で始まった。その時私は診療中、窓ガラス片等で患者が傷つかぬよう自分の体を盾に長い地震が収まるのを待っていた。

その揺れが続いている間に、すでに潮が引き始めているのを目にした時、近年に無い津波の予感がした。その後6mの津波警報を聞き、内心床下までと予想し、すぐ裏手の神社の階段を駆け上った。神社に着き10分弱で潮の流れが現れ想像を絶する20m程の大津波の始まりです。避難した神社は海に浮かぶ島と化し身の危険を感じ、潮が引くのを待ち更に高い場所に避難した。津波の去った後の町にはまるで浦島太郎の世界が広がっていた。勿論ライフラインはすべてアウトです。それからの9日間は自分で見聞きした事だけの情報しか無く、志津川地区がどうなっているのか、同地区の6名の先生方の安否も分からず、衣類、食糧・水の調達に走り回っていた。第一報は志津川の阿部公喜先生からで「歯科チームを立ち上げるから志津川アリーナまで来て下さい」という連絡で即出発……道無き道を瓦礫を避けなが

らやっと到着。阿部先生ご夫妻と公立志津川病院の斉藤政二先生が準備をして下さっていて、すでに内陸の先生からの診療車が到着していました。南三陸町の歯科医院は全て壊滅したものの茶園邦佳先生・高橋一夫先生・佐藤長幸先生の無事を確認し安堵した。その日の3月20日に診療開始。当初アリーナに診療車を固定し、材料不足もあり応急処置のみの治療となった。その後に宮城県歯科医師会の大型の診療バスが到着し、これを固定車のメインとし、小型の診療車で40か所にもおよぶ避難所の巡回診療が始まる事になった。4月中旬頃になると各家庭の後片付け等で日中の避難所には人影がまばらになり巡回診療の効率が低下して来た。

4月25日には志津川公立病院の仮設診療所がアリーナにオープンし、同時期に、3月20日から歌津平成の森で歯科診療にあたっていた海上自衛隊歯科チームも撤退した。

そこでアリーナは志津川病院斉藤先生・阿部先生チーム、戸倉地区は佐藤長幸先生に、私は巡回診療車で歌津の避難所の一つである平成の森でと、各



先生方で地域を分担しての診療再開となった。歌津で診療していた私は5月終わり頃には雨季も近づきまた、診療車内の湿度も高く脱水の危険性も増したためバスから屋根のある所に診療室を移し6月10日から診療を開始した。茶園先生は他県の御子息様の所へ、高橋先生は登米市で親戚の歯科医院の手伝い、阿部先生は9月初めまで公立病院に、10月18日より志津川仮設診療所にて診療を開始した。佐藤先生は戸倉地区で7月一杯まで続け、現在は登米市にて歯科医院建設中、私は10月20日から歌津仮設歯科診療所にて診療を開始した。

この間に北は北海道から鹿児島までの歯科災害派遣チームや個人ボランティアの先生・衛生士等々沢山の方々に支えていただいた結果、南三陸町の現在の歯科があるものと思っています。南三陸町を助けていただいたた歯科チームの中には、いまだに関心を持ち続けて居られる先生・衛生士の方々が多くいます。感謝の一言です。

宮城県歯科医師会はこの経験を存分に活かし、各都道府県に支援して頂いた御礼も含め、マニュアル的な指針を示す責務があると考えています。もうすでに災害マニュアル作りに取り掛かっている県もあります。出来るだけ早期にお願い致します。





## 東日本大震災を通じて感じた事

気仙沼支部会前会長 金澤 洋

東日本大震災でお亡くなりになった先生方デンタルスタッフ、また、未だに行方不明の先生に心より哀悼の誠を捧げます。 合掌。

大震災を体験した歯科医療人として感じた事を少しだけ書かせていただきたいと思います。

このような緊急時に多くのボランティアの歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の皆様の献身的な活動により数多くの地域住民が歯科医療の恩恵に与ることができましたことに先ずは感謝申し上げます。

大震災直後の混乱の中、停電、断水、スタッフの罹災等の障害のため、曲りなりに診療体制が整うまでに10日の時間を要しました。その間は在庫の歯ブラシを用いた避難所での口腔衛生活動が主たるものでした。宮城県歯科医師会からの支援物資が潤沢に届くようになってからは、避難民全員に行き渡る口腔衛生用品の配布とともに啓蒙活動を進めました。気仙沼市においては電気水道が回復しだい、被害の少なかった診療所から順に救急診療を開始しました。南三陸町においては巡回診療バスと訪問診療車による救急診療を避難所に隣接して始めました。その際には登米支部、栗原支部の先生方には物心ともに多大なご援助をいただきまして誠にありがとうございました。避難所の駐車場で車中泊をしながら診療に携わってくれた地元の先生方には心底頭の下がる思いでした。

そうこうしているうちに、PCATを中心としたボランティアの歯科医療チームが気仙沼に入り、避難所を手始めに活動が進められていきました。そして時間の経過とともに気仙沼巡回診療支援隊(JRS)に引き継がれてまいりました。JRSにおいて活動エリアは避難所にとどまらず、各種の老人施設、病院、在宅と活動範囲が広がり、当地域に口腔ケアの新しい種が播かれたように思っています。老人施設が被災し多くの利用者が避難を余儀なくされ、また直接的に施設が被災しなくとも停電、断水により低体温、

低栄養、脱水、口腔清掃状態の悪化、そして環境の激変によると思われる認知症の進行によるADLの低下をみてまいりました。震災後10日目からこれまで携わってきた2施設に歯科衛生士による口腔ケアを再開し入居者のQOLの向上に努力して参りましたが、被災のため転居された方々の中の幾人かを肺炎等で送ることになってしまいました。その中には摂食嚥下リハビリも順調で今後の期待が大きかった方も何人かいらっしゃいました。残念な気持ちと同時に自分自身の力不足を思い知らされました。

緊急時において歯科医療(キューア)が必要なことは言うまでもありませんが、同様に口腔ケアも必要です。命を守るという点においては、口腔ケアがより求められると言っても過言ではないかもしれませんが。私達歯科医師は緊急時の歯科における支援というとキューアに重きを置きがちです。しかしながら今後は災害時の歯科医療支援のスキームの中心に口腔ケアを据えていかなければならないのではないかと感じられました。

大震災から4カ月経過しようとする今現在、気仙沼市では大多数の歯科医院が復旧し、十分な歯科医療が提供可能な状態になりつつあります。しかしながら南三陸町では6つあった歯科医療機関のうち稼働しているのは公立志津川病院仮設診療所内の歯科口腔外科の2ユニットだけで、地域住民に必要な歯科医療を提供できる環境になく、速やかな仮設歯科診療所の設置が望まれています。予算は付いたもののなかなかスムーズに執行されない現状にいささか失望感を禁じえない心境ですが、こうした時こそ政治の力が及び被災地に一刻も早い復旧復興の喜びが訪れることを切望するものであります。



## 日本歯科医師会派遣チームへの感謝

宮歯派遣チームコーディネーター 猪苗代盛昭

3月11日東日本大震災後、日本歯科医師会派遣チームに帯同して、一人、一人が心に大きな穴があいてしまった中で、何にも出来ずに只、只、ひたすら身内の不明者を探し続けた。3週間が過ぎた頃だろうか、父の命日の為に寺に寄った帰り「気仙沼市民健康管理センター すこやか」が大混雑の中医療団が来ている事を知り、「何か力になれないかなあ」とセンター長と話をしたのが最初であった。電気、水道が47日間も自宅では使えず、携帯電話を渡されたがうまく使えない状態で毎日をすごしていた。すでに数チームが入り、今は神奈川チームだということを知り「気仙沼市民健康管理センター すこやか」の職員と共に現場への行き方、そして歯科医療の器具等の相談にのりはじめた。北海道チーム、長野チ

ーム、兵庫チーム、高知チーム、山梨チーム、神奈川県チーム、岡山チーム、そして京都のチームと御世話をさせてもらった。各チーム共使命感に燃えた心強い方々でした。こんなすばらしい人が、まだ日本にはいるんだという気持ちを持たされ勇気づけられ、そして黙々と働く歯科医療チームであったと思う。又、宮城県歯科医師会を中心とした歯科用具の多種さと目一杯の援助にも心強いものがあつたが、残念な事に備品の整理が行き届いておらず、管理体制の重要さが身にしみた。善意の品物がきちんと使われてこそ、歯科関係者達から送られたことに対する恩義ではなかろうかと思ひ管理の方にも目を光らせて、時々には派遣チームとやりあつたことも今ではなつかしい思い出となっています。